

ミヒャエル・エンデ『モモ』における時間の本質について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文学部 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 良孝 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00000437">https://doi.org/10.14945/00000437</a>

# ミヒヤエル・エンデ 『モモ』における時間の本質について

小 林 良 孝

Michael Ende 著《MOMO》は、1973年に世に出され、その年にドイツ児童文学賞を受賞した。1993年時点でも既に33カ国語に翻訳され、現在でもその人気は衰えず、子供たちのみならず大人たちによっても読まれている。

この本の表題『モモ』には『時間泥棒と盗まれた時間を人間に取り返してくれた子供についての不思議な物語』という副題がついている。すなわちこの物語は、人間の「時間」をめぐる、「盗む」・「取り返す」のファンタジック・アクション・ロマンなのである。

ここで問題なのは、一つには、この物語で言う「時間」とは何かという事であり、もう一つは、「盗む」とか「取り返す」とかいうことはどういうことなのかということである。本稿ではこれらの問題について論じる。

## 第1章 この物語で問題としている時間とは何か

エンデは第6章の冒頭で次のようにいっている。

重大ではあるけれども極めて日常的な秘密が一つあります。人間は誰もがそれに関与していて、誰もがそれを知ってはいるのです。しかしそれについてよく考える人は極く極く少数なのです。大多数の人はそれを単にそのまま受け取っているだけで、それを爪の垢ほども不思議には思っていないのです。この秘密とは時間なのです。

時間を測るためには、カレンダーや時計がありますが、これはほとんど重要ではなさそうです。というのは、時間というものは誰もが知っている通り、その時その人が何を体験しているかに従って、たった2、3時間なのにそれを永遠のように長く思うこともあるし、時には、それはほんの一瞬のうちに過ぎ去ってしまうこともあり得るからです。というのは、時間は生活だからです。そして、生活は心の中に宿っているものなのです。

(Zeit ist Leben. Und das Leben wohnt im Herzen.)<sup>(1)</sup>

この命題により、エンデが問題としている「時間」は明確に規定されている。これは本稿の要であるので、念のためにもう一度明確にしておこう。すなわち、エンデが問題としている時間は、時計で測定される数量としての時間ではなく、その人がその時何をして「体験している」(erleben)かにより、永遠にも、時には一瞬にも「思われる」(vorkommen)時間なのである。つまり意識化された時間、主観的な時間なのである。しかも、その時間は「生活」(Leben)なのである。従って、エンデが問題としている時間とは、人々が日常、意識的に営んでいる「生活」そのものである、ということになる。換言すれば、各人が選び取った「生活」の送り方、つまり自ら決定して選び取った生活内容としての時間なのである。

従って、「時間どろぼう」とは生活内容どろぼうということであり、その結果として、それまでとは異なる生活内容が導入されることと同じことであり、「盗まれた時間を取り返す」ということは、もとの生活内容を取り返すということと同じことである。

具体的な生活内容は、具体的な生活理念によって決定される。この観点からすれば「時間どろぼう」とは、ある特定の生活理念を奪い取り、それに代わって別の生活理念を導入し定着させることであり、「盗まれた時間を取り返す」ということは、元々の生活理念を復活させる、ということなのである。

従って、物語『モモ』は、人々の生活内容を語りつつ、根本的にはあるべき生活理念を論じていると見なすことができるのである。言うまでもなく、登場人物モモは、あるべき生活理念の擁護者であり、灰色の男たちはあるべき生活理念の略奪者であり、あるべからざる生活理念の導入者である。モモと灰色の男たちの抗争は、時間をかくれみのとした生活理念をめぐる抗争物語なのである。更に踏み込んで言えば、モモ対灰色の男たちの争点は、あるべき心・精神は何であるかということであり、実生活において実現すべき価値は何であるべきかと言う問題なのである。

## 第2章 モモの時間の本質

エンデは、物語『モモ』の舞台を次のように物語っている。

…しかしこれらの古い大都会のいくつかは、今日に到るまでなお大都会であり続けているのです。勿論そこでの生活は変わってしまいました。人々は今では自動車や電車に乗り、電話や電気を使っています。それでも新しい建物の間のあちこちには、昔の円柱や、門や、外壁が残っていたり、あ

るいは昔の屋外円形劇場が残っていたりします。

そしてこのような都市のひとつでモモの物語は起きたのです。

この大都会の南はずれ、すでに野原が広がり始め、家々はだんだん見すぼらしくなってくる所に、松林におおい隠されて、一つの小さい屋外円形劇場の廃虚がありました。それは当時の昔でさえ決して豪華なものではなく、当時でさえもいわば貧乏人むけの劇場だったのです。私たちの時代には、すなわちモモのこの物語が始まった時には、この廃虚はほとんど忘れ去られてしまっていたのです。<sup>(2)</sup>

ある日、どこからともなく1人の少女がやって来てこの廃虚に住みついたのである。その子の名は自称モモ。<sup>(3)</sup>すなわち、モモは時代の変化の中でほとんど忘れ去られてしまったものと、しかもこの世の富とかきらびやかさとは縁もゆかりもないものと結びついているのである。モモに年齢をたずねても要領を得ない。仕方なく100歳と答えたり、102歳と答えたりして、モモの身を案じてその廃虚にやってきた近隣の人々の失笑をかうだけである。親は誰か、どこからやって来たのかとたずねられても、仕方なくゆき当りばったり、ただうろろ遠くの方を指さすだけなのである。つまりモモの出自には、現実の人間の存在規定である時間規定も空間規定さえも欠如しているのである。モモに関して不思議なのはこれだけではない。それは、モモの持っている能力である。この不思議な能力とは「聞く」能力である。これについては、子安美知子著『「モモ」を読む』（学陽書房）の中で、次のように述べられている。

86年の夏、来日中のミヒャエル・エンデ氏を私たちの日本シュタイナーハウスにお迎えしたとき、かねてからモモの「聞く力」に深くとらえられていた友人たちのひとりが、

「エンデさん、あの秘密は何でしょう。不思議な力ですね。」

とたずねました。エンデ氏は、かみしめるような口調でこう答えました。

「モモが身につけていたような、ひとの話に聞き入る力、その秘密は、自分をまったくからにすることにあります。それによって、自身の中に他者を迎える空間ができます。そしてその相手をこの空間に入れてあげます。モモは、そうやって彼女の中にはいってくるものが、良いものか悪いものかを問うことをしません。<sup>(4)</sup> (20 ページ)

モモの「聞く」能力が不思議な能力であると言われる理由・根拠は、モモが「聞く」時のモモの心の状態にある。上に引用したエンデの言葉によれば、モ

モは「彼女の心の中に入ってくるものが、良いものか悪いものか問うことをしない心の状態」で聞くのである。こういう心の状態が不思議なのである。それ故、モモの「聞く」能力は不思議な能力なのだ。こういう心の状態を人によっては、誕生以前の心の状態と称するかもしれない、また人によっては空の状態とか無の状態と称するかも知れない、また人によっては深層自我の状態と称するかもしれない。ここはエンデの言葉を受け入れて、「から」の心の状態と称することにしよう。いずれにせよ、10歳くらいにもなってしまった子供がこういう「から」の心の状態になれることが不思議で、並ではないのだ。ましてや、40歳、50歳と年をくってしまっ、て、分別ざかりの年齢になってしまったら、こういう心の状態にはなかなかなれるものではないのだ。だから不思議なのだ。

モモの「聞く」能力が不思議な能力である理由、根拠は、モモの「聞く」行為それ自体にもある。モモが「聞く」行為には二つの意味がある。モモの「聞く」という行為は、良し悪しを言わずに、ありのままの相手を自分の心の中に迎え入れる行為なのである。モモはこうして相手を自分の心の中へ統合し、自ら進んで相手と全一の存在となる。ここにおいてはもはや、自他の対立はおろか、区別さえも存在しない。この時、モモの心の中にはありのままの相手が自己自身として存在する。従って、自己のごとく、相手がありのままによくわかるのである。モモが耳を傾ける相手は人間だけではない。オオムやコオロギにも、風や雨にまで耳を傾けた。モモが特に耳を傾けるのが好きだった対象は大宇宙であった。大宇宙に耳を傾けている時、モモには言うに言えぬ程美しい宇宙の音楽が聞こえてくるのであった。こうしてモモは、宇宙の森羅万象と統合した完全な全一的存在だったのである。従ってモモの持っている徳は、対立的他者との分離関係に基づく徳ではない。モモの持っている徳は、他者と統合した全一的モモ自身に存在根拠がある徳なのである。他者に存在根拠がある徳を自然的徳と呼ぶのに対して、他者に存在根拠を持たない徳を超自然的徳という。モモの持っている徳は、この超自然的徳である。それは、愛する、希望する、信ずる、空想する、この四つである。<sup>(5)</sup>

モモの「聞く」行為にはもうひとつの意味がある。これは、モモが灰色の男の話を書く際に特に顕著に表れている。

しかし、この男の話を書くことは、これまで彼女が相手にしてきた誰の話を書くよりももっとむずかしいのです。ほかの人の場合には、いわば相手の心の中へすっぽりと入り込んでいって、相手が言っていることも、相手の本当の心も理解することができたのです。しかし、この訪問者の場合

に限って、それがどうしてもうまく行かないのです。何回やってみても、そこには誰も居ないみたいに、暗やみの空虚の中へ落ちこんで行くような感じなのです。<sup>(6)</sup>

モモの「聞く」行為は、自分の心をからにして全力で相手の心の中へ入っていく行為でもあるのだ。こうしてモモは聞きながら、自分を相手に統合させ、相手をも自他全一の存在たらしめる。しかし、相手を自分の心の中に迎え入れることによって現前する全一的存在と、自分の心を相手の心の中に入れることによって現前する全一的存在は別のものではない。モモが「聞く」ことによって、自分も相手もひとつの全一的存在を共有するのである。そしてこの全一的存在の中では自他共に相互に相手の徳に働きかけられた状態になっている。そしてその働きかけに感応するか否か、あるいはどの働きかけにより敏感に感応するかは、その当人の個性と能力にかかっているのである。すなわち、モモの側から絶えず、愛する作用、希望する作用、信ずる作用、空想する作用を加え続けていても、その働きかけのうちのどれに感応し、どれと共振するかは働きを受ける側の個性や能力によって決まるのである。

このことは物語『モモ』では、次のように語られている。

モモに話を聞いてもらっていると、ばかな人にも急に分別のある考えが浮かんできたのです。モモは、相手の人がそのような考えにたどり着くように誘導するようなことを言ったり、たずねたりするわけでは全然ないのです。モモはただそこに座って全身全霊で注意をかたむけ同情心をもってひたすら聞いているだけなので、その時モモは大きな黒い目で、相手の人をじっと見つめているのです。そうするとその当人は、自分のどこにそんな考えがひそんでいたのか、今まで思ってみたこともないような考えが急に浮かび上がってくるのを実感するのです。

モモに話を聞いてもらっていると、途方にくれてぐずぐずしている人々でも、自分たちがしようとしていることが急にはっきりとわかってくるのです。あるいは内気な人々は急に自由闊達勇気りんりんたる気分になるのです。あるいは不幸な人々や意気消沈している人々は、自信がわいてきてほがらかになるのです。<sup>(7)</sup>

これにひき続いて、エンデは上に抽象的に述べたことを具体的に物語として展開していく。

「ばかな人にも急に分別のある考えが浮かんでくる」場合として、左官屋のニコラと安居酒屋の主人のニノとの喧嘩話としておもしろおかしく語られてい

る。この2人は各々自分だけが一方的に侮辱されたと思いこみ、お互いに悪いのは相手だと思いこんでいる。また、自分だけが一方的にだまされ、自分だけが一方的に被害をこうむっていると思いこんでいる。こうして2人は積年のうらみで殺し合いにもなりかねない程仲が悪かったのである。そんなある日、モモが現れる。まわりの人々から、モモの所へ行ってごらんとすすめられて、しぶしぶモモの所にやって来る。2人は廃虚の円形劇場の両端に陣どって、モモの目の前で、仇敵同士の果たし合いのような激しい口喧嘩を始める。お互い相手を非難し合っているうちに、双方に等しく原因があったということ、しかもその原因たるや、たいして悪気もない他愛もない駄じゃれだったということがわかってくる。また、自分の方が一方的にだまされ、自分だけが損をしていると思い込んでいたことも、実は双方とも負けず劣らずうまいことをしようと欲を持っていたことがわかり、実際には、双方ともあまり損も得もしていなかったこともわかってくる。

そうすると突然、2人は同時に笑い出しました。2人は石段を降りてきて、草の生えている舞台のまんなかで出会い、お互いに抱き合っけて背中をポンポンとたたき合いました。それから2人はモモを抱いて言いました。「どうも、ありがとう！」<sup>(8)</sup>

こうしてモモのまわりの世界では、憎悪と不信、敵害心と恐怖に満ちた社会生活が消え去り、和解と思いやりに満ちたほがらかなしあわせな社会生活がおのずと営まれるようになるのである。これをキーワードで言えば「隣人愛」、更に言えば「愛」である。

モモに話を聞いてもらっているだけで、「自分のどこにそんな考えがひそんでいたのか思ってみたこともないような考えが急に浮かび上がってくる」場合の典型は、観光案内人ジジの場合と子供たちの場合である。子供たちの場合は、何をしていいのかわからずに「途方にくれてぐずぐずしている人々でも、自分たちがしようとしていることが急にはっきりとわかってくる」場合の例としても、「内気な人々は、急に自由闊達、勇気りんりんたる気分になる」場合の例としても見なすことができる。まずは子供たちの場合を見てみよう。

ある日、10人程の子供たちがモモと遊びに円形劇場へやって来る。あいにくその時は、モモは外へぶらつきに行っていて、るすであった。そうすると、次のような状態になるのである。

「私、もう家へ帰ろうかな。」と、小さい子供を連れている女の子が言いました。「雷が怖いわ。」

「じゃあ、家に居れば、怖くないのか。」と、めがねをかけた男の子が言いました。

「怖いわ。」とその女の子は答えました。

「じゃあ、ここに居たって同じじゃないか。」と、その男の子は言いました。その女の子は肩をすぼめて、うなずきました。しばらくすると、その女の子は言いました。「でも、モモはきっと帰って来ないわ。」

「それがどうしたというんだよ。」と、少しだらしない身なりをした男の子が話にわって入ってきました。「そうだとすると、僕たちは遊ぶことはできるじゃないか——モモが居なくなつてさ。」

「じゃあ、何をするのよ。」

「知らないよ。でも、何かだよ。」

「何かじゃ、どうにもならないわ。誰かいい考えはある？」

「わかった」と、かん高い女の子の声をした肥った男の子が言いました。「遊ぶことができるよ。この廃虚全体が一隻の大きな船で、僕たちは未知の海へ乗り出して行って、冒険をするんだ。僕が船長、君は一等航海士だ。そして君は自然研究者の大学教授だ。なぜならこれは、研究のための航海なんだからね。他の子は水夫だ。」

「じゃ、私たち女の子は何なの？」

「女水夫だよ。これは未来の船なんだから。」

これはいい計画です！ 彼らは遊ぼうとしました。しかし、皆の気持ちがじっくりひとつにはならないのです。この航海ごっこは始まりませんでした。すぐに皆は石段に座りこんでしまい、ただ待っているだけでした。<sup>(9)</sup>

モモが居ないと、こんな状態になるのである。そこへモモが帰ってくる。そうすると、どうなったか。モモと一緒に居るだけで、子供たちは死からよみ返ったように生き生きと、しかも全員心をひとつにして、「アルゴ船」ごっこを始めたのである。研究船「アルゴ号」は、子供たちを乗せて、サンゴ海の大海原へ、波頭を高々とけたてて大冒険へ向かって船出して行ったのである。この冒険の様子は、原文を読んでもらう方がいい。子供たちのこの自由闊達さ！ 彼らの勇敢さ！ 天かける空想の豊かさ！ 子供たちは夕立が来たのにも気づかない程、遊びに熱中したのである。<sup>(10)</sup> これらの子供たちの能力をキー・ワードで言えば、「勇気」、「空想」、「熱中」、「喜び」である。

モモに話を聞いてもらうだけで空想力に命を与えられたのは、上に述べた子供たちだけではない。モモを恋い慕うハンサムな青年ジロラモ、通称観光ガイ



ドのジジの空想力もモモとの出会いによって、子供たちのそれ以上に、生き生きと空に舞い上ったのである。

以前には彼のお話は、みじめな状態に陥ったこともしばしばありました。どうしてもちようどいいことが思い浮かんでこなかったからです。いろいろな話を繰り返し話したりしてもしました。映画で見たことのある話や、新聞で読んだ話をやむを得ずひっぱり出すこともありました。言うならば、彼の話は、足で歩いていたのです。しかし、彼がモモを知ってからは、彼の話は突然翼を得たのです。特に、モモが傍らに居て、彼に耳を傾けていてくれる時には、彼の空想力は、さながら春の野辺のごとく花盛りになったのです。子供たちも大人の人たちも彼のまわりに集まってきました。今や彼は、何日間も何週間も続く長い物語でも話すことができました。話の種は無尽蔵に思い当たるのでした。<sup>(11)</sup>

こうして彼は、類まれな観光ガイドになったのである。とは言え、この円形劇場の廃墟を訪れる観光客はきわめて少なかった。そんないわば迷いこんできた珍客を見つけると、ジジはさっそく観光ガイドに早変わりして、奇想天外な物語を空想のおもむくまま語りながら、この廃墟を案内して回るのである。

ある日の彼の話によればこうだ。昔々、シュトラパチア・アウグスティナという名の欲深い女帝がいた。アウグスティナ女帝がブルブルビクビク族を征服した時、噂に聞いていた金魚を強制的に献上させた。ブルブルビクビク族の王は本当の金魚は隠し持ち、この魚は完全に成長してしまった後には全身がそのまま純金に変わる金魚でございますといつわって、1匹の子鯨を献上した。本当の金魚を知らなかった女帝は、それを真に受けて、その鯨を大切に飼育させた。「大きければ大きい程いい」<sup>(12)</sup>と思っていた女帝は、鯨が成長するのに合わせてとうとうこの円形劇場に水を張って、ここにその鯨を泳がせておいた。つまりこの円形劇場の廃墟は、昔々鯨を飼っておいた池の跡だというのである。

また、他のある日、アメリカ人観光客相手のジジの話はこうだ。昔々、〈赤い王〉とあだ名された暴君マルクセンチウス・コムヌスという王がいた。彼は、今ある世界を見ずして、完全に新しい世界をつくる方がいいと考え、今ある地球を材料にして全く新しい地球を作るよう、命令した。観光ガイドジジの話によればこの円形劇場の廃墟は、マルクセンチウス・コムヌス王が作らせた新しい地球をのせておいた台座だったというのである。

ジジの空想力が最も美しく花開くのは、観光客が誰もいなくなった晩、美しく星のまたたきはじめた大空の下、円形劇場の廃墟の石段の一番上で、モモと

仲よくならんで腰をおろし、2人きりでないしょ話をする時である。その話は、「魔法の鏡のお姫さま」<sup>(13)</sup>という題で語られている。彼のこの話によれば、モモは「天界の国」のお姫さまで、ジジは下界の「あすの国」の王子さまジロラモだったというのだが、特にこの物語は、荒筋で紹介するのはやめておいた方がいいであろう。一字一句読んでもらう方がいい。

要するに、アウグスティナ女帝の話にしろ、マルクセンチウス・コムヌス王の話にしろ、「魔法の鏡のお姫さま」という題の話にしろ、ジロラモの生活・時間の本質は、従ってモモがジロラモの生活において実現した時間の本質は、キーワードで言えば「空想」（空想力の躍動）と「愛」である。空想は、古来、人間の備えるべき秀れた心の能力、すなわち徳としては等閑視されてきたものである。しかし、空想は人格の豊かな成長に不可欠のものであり、この空想と対極をなす現実とは、時として空想に新しい命を与え、あるいは空想を健全に育てるものなのである。あるいはその逆に、空想によって現実には新しい内容を与えられることもあり得るのである。このことは、エンデ著『はてしない物語』の主題でもあろう。ともかく空想と現実とは、独自に存在しつつ相補的に作用し合ってはじめて人間の生活・時間は健全に豊かになるものなのである。

しかし、この円形劇場を訪れる観光客はほんのたまにしかいなかった。だからジジは他の仕事にも手を出さざるを得なかったのです。機会さえあれば彼は、公園の番人にも、結婚式の立会人にも、犬の散歩役にも、恋文の運び役にも、葬式の参列者にも、おみやげ物売りにも、ネコのえさ売りにも、その他たくさんいろんなことをやりました。

しかしジジは、いつかは有名になり、お金持ちになることを夢見ていました。庭園にかこまれたおとぎの国のように美しい邸宅に住んで、金のお皿で食事をして、絹の布団にくるまって眠るのだ、と夢見ていました。そして彼は、まるで太陽のような未来の栄光の中に居る自分自身を夢見ていたのです。そうするとその未来の栄光の輝きは、極貧のどん底にいる今の彼を、いわば遠くから温めてくれるように温めてくれたのです。

他の人々が彼のこの夢を笑いものにでもしようものなら、彼はどなりつけたのです。

「俺はきっとやってみせるからな！ 今に思い知らせてやるからな！」<sup>(14)</sup>

このように彼の生活は、「希望」・「夢」に満たされていたのである。つまり彼の生活時間の本質は、「希望」でもあった。

このジロラモと甲乙つけがたいくらいモモが好きだった人に、もう1人、道

路掃除夫のベッポが居た。このベッポじいさんもジロラモ青年と同じように、モモと不思議な縁で結ばれていた。しかし、ベッポじいさんの性格や生活信条は、ジロラモのそれとは好対照をなしていた。観光ガイドのジジは、あまりにもけたはずれの空想力故に他人からは嘘つき呼ばわりされることもあった。道路掃除夫ベッポは、あまりにも無口だったため他人からは頭のいかれた奴だと思われていた。しかしこの2人は、決して相手を非難することもなかったし、ばかにすることもなかった。互いに耳を傾け合い、互いに一目置き合っていたのである。これもモモの徳によって結ばれていたためであろう。

道路掃除夫ベッポは頭がおかしいと思っている人もたくさんいました。というのは、彼は質問されてもただにこにこしているだけで答えなかったからです。彼はよく考えこんでいたのです。そして返事は必要ないと思えばだまっていました。しかし返事が必要だと思えば、どう返事をすべきか、よくよく考えていたのです。2時間も考え続けていることはよくありました。時にはまるまる一日中考え続けていることもありました。それからやっと彼は返事をしたのです。そうこうしている内に質問をした当人は、自分が何を質問したか忘れてしまっているのです。ベッポの言うことを奇妙に思ってしまうのです。

モモだけはいくらでも長く待つことができましたし、彼の言うことがよく理解できました。彼がこんなに長い時間をとるのは、彼がけっして本当でないことは言わないようにしているからだということが、モモにはわかっていましたからです。彼の意見によれば、この世の不幸はすべて、急ぎすぎたため、あるいは正確なことを知らなかったため、わざとついた嘘や、思わず知らずついた嘘が原因で生まれてくるのだ、というのです。<sup>(15)</sup>

正に彼の徳は「正直」・「慎重」そのものだったのである。更に、ベッポの仕事に対する考えはこうだ。

彼は自分の仕事を喜んで念入りに徹底的にやりました。彼は、この仕事がとても大切な仕事であることをよく知っていました。

道路を掃除する時、彼はゆっくりと、しかし着実に行いました。一歩進んではひと呼吸し、そしてひと呼吸してはひと掃きするのです。一歩——ひと呼吸——ひと掃き。一歩——ひと呼吸——ひと掃き。こうして仕事をしている最中にも彼は時々しばらくの間立ちどまっては自分の足もとを見て、もの思いにふけります。それからまた続けるのです。一歩——ひと呼吸——ひと掃き。一歩——ひと呼吸——ひと掃き。—— —— ——<sup>(16)</sup>

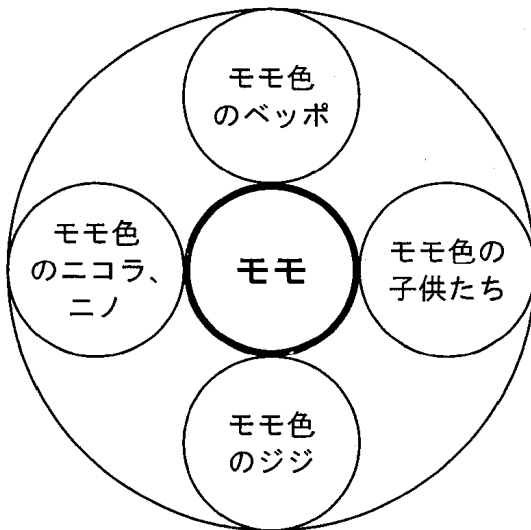
ベッポは、世間の人々がさげすむような道路掃除の仕事の重要さを、信じて疑っていないのである。かつまた、世界の人々が嫌がるこの仕事を喜んでやっているのである。しかも、仕事を急いでやろうとか、能率よくやろうという考えは全くない。物思いにふけりながらゆっくりと着実にやるのである。

ベッポは、こうして道路掃除をしている時、何百年も前の昔を見ることがあった。彼の話によれば、昔々、このまちの旧市街の外側に市壁を造る工事が行われた時、彼とモモは共にその工事にたずさわっていた同朋だったというのである。彼は過去世を見る能力を持っていた不思議な人なのである。この点で、ベッポの眼差しは、夢見るジロラモの眼差しと正反対の方向に向けられていた。要するに、ベッポの仕事・生活・時間の本質は、「信念」・「喜び」・「思慮」にある。

ベッポの仕事ぶり、つまり生活の仕かたからは是非読み取らなければならないことが、もう一点ある。それは、ベッポにとって大切なのは、仕事は慎重に徹底的に、つまり良心的に完璧に、しかも嬉々として仕合わせな気持ちで行うということであって、決してそそくさと、いいかげんに、しかも不満たらたら行っはならないということである。ベッポにとって大切なのは、仕事の質であって、量ではない。そしてこの点こそ正に、次章で説明するように、モモの時間が灰色の男たちの時間と直接的に対極をなしている点なのである。

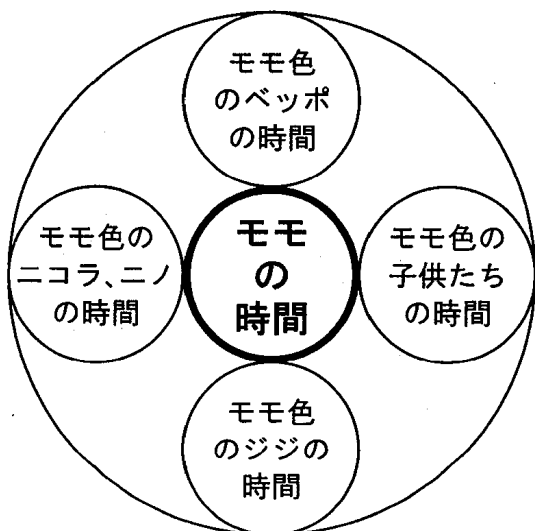
以上が、モモに話を聞いてもらうことによってモモに感化された人々として、この物語の中に登場して来る人々である。モモに感化されたこれらの人々を、その各々の名の前に「モモ色の」という形容詞を冠して表示することにする。そうすればモモによって実現された世界は、第1図で表わすことができる。

第1図

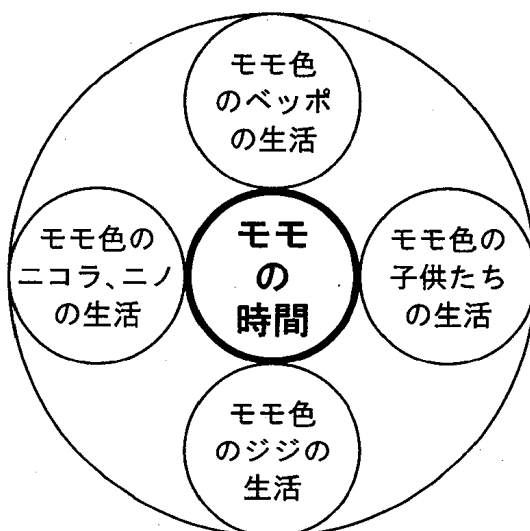


ここで、既に引用したエンデの時間についての命題をもう一度引用しよう。「時間は生活である。」すなわち、時間=生活である。これを図で表わすと、次のようになる。

第2図



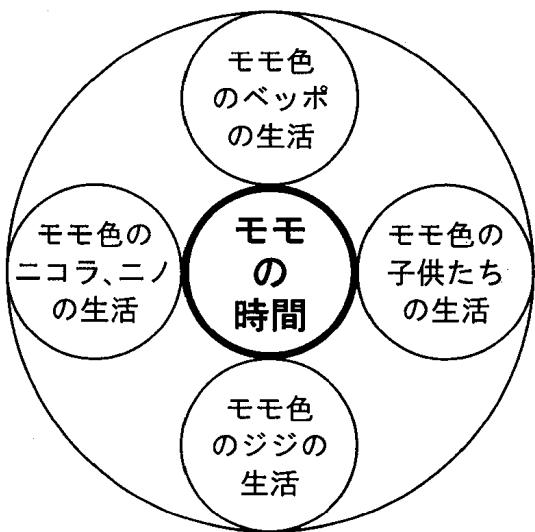
第3図



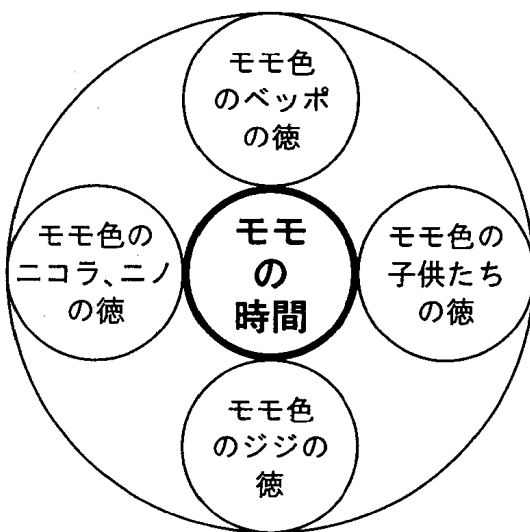
人々の生活は、その当人の能力と心の状態によって形成される。モモに感化された人々の心の能力を徳という概念で置きかえれば、人々の実生活は、その当人の能力及び徳によって形成されるということになる。従って、その人の能力や徳（内面）が変化すれば、その人の実生活・生活の仕かた（外面）も変わってこざるを得ないのである。その人の生きざま、すなわち実生活は、その人の能力や徳と表裏一体の関係にあるものなのである。エンデが『モモ』で展開しているのは、正にこの局面での時間なのである。

これを図で表わせれば、次のようになる。

第3図 外側



第4図 内側



『モモ』という物語の中で展開されている、この人はこうした、あの人はああしたこうしたという具体的な行為を抽象して、この人の徳はこれだ、あの人の徳はあれだと論ずるのは、本稿の筆者の解釈である。しかし、『モモ』で問題にされている「時間」を本質的に明確にするためには、これは不可欠な作業なのである。では、モモに話を聞いてもらうことにより、これらの人々がどのような徳を身につけたのか、これは本章において個々の登場人物の生活を描写しながら既に述べてきたことであるが、ここでそれを総括すれば次の通りである。

モモ色のニコラとニノの徳：**愛**（隣人愛） 熟練

モモ色の子供たちの徳：**空想力** 勇気 熱中 喜び

モモ色のジジの徳：**希望** 空想力 愛（恋愛）

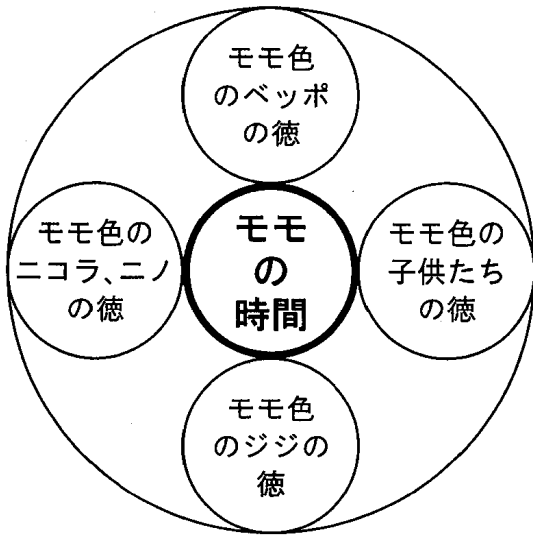
モモ色のベッポの徳：**信念** 愛 思慮 正直 勤勉 喜び

上記の愛と希望と信念は、伝統的には「超自然的徳」と呼ばれている徳である（子安美知子著「エンデと語る」朝日出版 83～84ページ参照）。ここで一考を要するのは「空想力」である。この空想力は、伝統的には、自然的徳の内にも、超自然的徳の内にも数え入れられてはこなかった。エンデ自身も、空想力は自然的徳であると言っていないし、超自然的徳であるとも言っていない。かといって、徳ではないと言っているのでもない。しかし、モモを取巻いている世界の中では、子供たちはきわめて重要な構成員であり、空想力はそれらの子供たちのきわめて重要な能力なのである。このことは、子供たちの「アルゴ船」ごっこの中で十分に語られていたことである。それ故、空想力も明確に徳の一つとして数えられるべきである。それなら、空想力は、自然的徳であろうか、超自然的徳であろうか。空想は現実を超えている世界への想いであり、現実としての自然を超えている世界への思考である。空想力は、自他分離認識に基づき、他＝現実としての自然に、このましく対処するための手段的な徳ではない、すなわち自然的徳ではない。空想力は、人間に自他分離認識以前から本源的に備わっている能力であり、本源的生命の躍動そのものなのである。それ故、空想力は超自然的徳である。

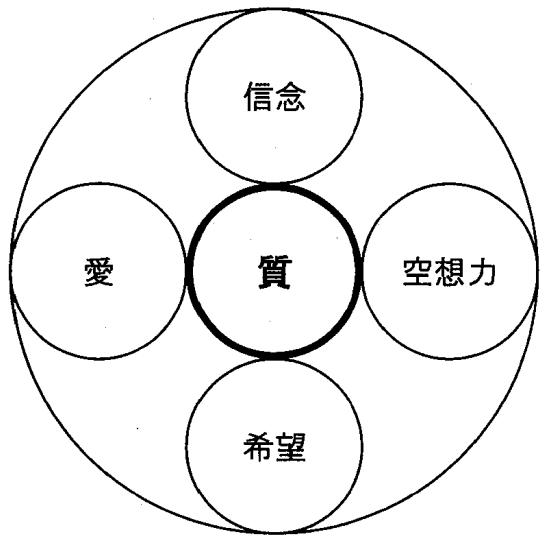
こうして見ると、モモの世界の時間は、超自然的徳を基盤とし、更にその上に自然的徳を補助的に加えて形成されているのである。

そして、エンデは上記の徳を質としてとらえているのであって、けっして計測可能な数量としてとらえているのではない。この点も、モモと灰色の男たちとの関係を考慮に入れれば非常に大切な点である。これを図式化すれば、次の通りである。

第4図

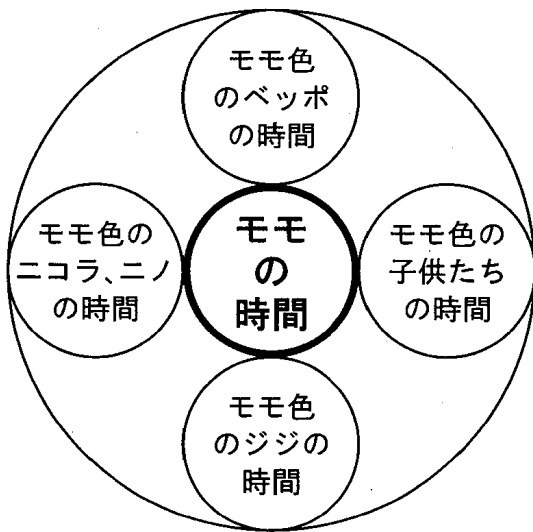


第5図

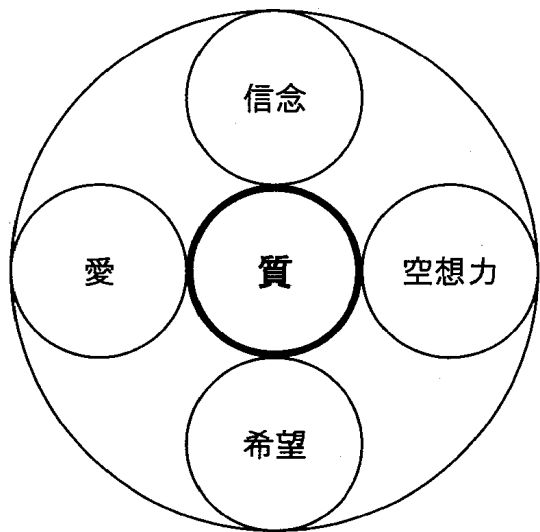


結局、モモの時間（第2図）は本質として見れば第5図で表わされる。

第2図



第5図



こうして、質本位の価値観をとるモモを中心とした世界では、その世界の構成員の個性と能力に応じて、各々の超自然的徳を身につけ、モモの価値基準から見た理想的世界がまず実現されたのである。モモは、質本位の価値全体（第5図）を擬人化したものと見ることもできる。物語『モモ』のストーリーの展開としては、このモモの世界の中へいよいよ灰色の男たちが登場して来る段取りになる。

### 第3章 灰色の男たちの時間の本質

モモの登場が、人々の日常生活意識の変化を述べる道具だてだったと同様に、灰色の男たちの登場も人々の日常生活意識の変化を述べる道具だてである。

この3人の友情にやがて影がさすことになろうとは、3人の内誰一人として気がつきませんでした。彼ら3人の友情にだけではなく、この地方全体にこの影はさし始めたのです。その影はどんどん広がって行き、今では暗く冷たく、街全体に広がってしまったのです。それはまさに、音もなく、人に気づかれずに日一日と深くくい込んでくる侵略軍のようでした。しかし、彼らに対しては誰一人として自分の身を護る人はいませんでした。なぜなら、誰一人として彼らに気がつかなかったからです。この侵略軍とは——それはいったい誰だったのでしょうか。<sup>(17)</sup>

この侵略者に初めて気がついたのはモモであった。やがて、ベッポとジジも、周りの人々の生活の異変に気づく。

ジジは……言葉を続けた。「最近おれは、街で昔なじみの人に出会ったんだ、フージーという名前の床屋さんさ。しばらく会ったことがなかったので、しばらくの間彼だとは気づかなかったよ。とにかく彼はすっかり人が変わってしまっていてね、とっても神経質で、とっても無口で、とっても無愛想になっていたよ。昔は彼はいいやつだったのになあ。歌をうたうのは上手だったし、何ごとについてもしっかりと自分の考えを持っていた。ところが急に、彼にはそういうことをしている時間がなくなったのさ。彼はもはや彼自身の幽霊にすぎない、もはやあのフージーなんかではない、わかるかい？ それが彼一人だけなら、あいつは少し気が変になってしまったんだとおれは思うだろう。しかしどこを見まわしても、今ではこんな人々しか見あたらないんだよ。しかも、こういう連中がどんどん増えてきている。今では、おれたちの昔なじみの友だちでさえ、そうなり始めている。伝染する気狂病なんていう病気があるんじゃないかって、本当に疑ってしまうよ。」

ベッポはうなずいて言った。「全くだ。あれは一種の伝染病にちがいない。」<sup>(18)</sup>

灰色の男たちの出現は、正に人々の生活意識の変化、従って日常生活の仕方の変化として、従ってその人柄の変化として表われてきたのである。

それでは次に、これらの灰色の男たちが人々をどのような手段で侵略するのか、また、侵略されてしまった人々は、どのような変化をとげるのか、これを具体的に見て行くことにしよう。



灰色の男たちは、一番征服しやすい相手から仕事を始めて行く。それは、モモの感化を最も受けていなかった大人の人々である。いわば、モモと縁のうすかった一般的な労働者である。その代表的な例として、床屋のフージー氏の場合が、物語としてたくみに描写されている。そして、このフージー氏こそ、典型的な世俗の人と見なすべきなのである。

フージー氏は今は42歳、腕のいい床屋さんである。店は小さいながら、これまでは自分の仕事にとりたてて不満もなく、顧客とのんびり楽しく雑談しながら、まあまあしあわせにこの道一筋に励んできたのである。しかし、ある雨の日、一人で店の中で客を待ちながら、路上にはねかえる雨足をぼんやり眺めていた。その時、ふっとこんな感慨が彼の胸中をよぎったのである。

はさみチョッキンチョッキン、おしゃべりペチャクチャ、シャボンの泡泡、ああ、おれの人生はこうして過ぎて行くのだ。いったいおれの人生に何の意味があるというのだ。おれなんか、ひとたび死んでしまえば、居なかったも同然じゃないか。<sup>(19)</sup>

まさに、誰でもいつか一度くらいは持ちそうな感慨である。もしもこんな時、彼がモモに話を聞いてもらっていたとしたら、彼の人生はどうなっていたであろうか。

モモに話を聞いてもらっていると、どうしていいかわからずくずくずしている人々は急に自分の意志がはっきりしてくるのです。ひっこみ思案の人々は急に自由になり勇気が出てきたような気分になるのです。そして、自分の人生は完全に失敗だった、何の意味もない、おれなんか何百万人もの中の何のとりえもない一人にすぎない、さながら割れどんぶりと同様、いつだってたちどころに取り替えられる人間にすぎないんだ、と知っている人がいるとします。——こういう人が出かけて行って、モモに何もかも話を聞いてもらったとします。そうすると不思議なことに、話をしている最中にも、自分の考えが根本的に間違っていたことがはっきりとわかってくるのです。どんなにたくさん人々が居ようと、自分の人生はかけがえのない一回限りの人生なのだ、だから自分は自分なりにこの世界に対して重要なのだ、ということがわかってくるのです。<sup>(20)</sup>

しかし、フージー氏が人生の虚無感に襲われてもの思いに沈んでいたその雨の日、彼が出会ったのは不幸にも、モモにではなく灰色の男にであった。この時、彼の店に入ってきたのは、時間貯蓄銀行の外交員と称する灰色の男ナンバーXQY/384/bであった。彼が入ってくるなり店の中には冷気が漂った。彼

はさっそく時間を貯蓄するよう勧誘を始めたのである。

「おわかりですよ、フージーさん。」と、その外交員は言った。「あなたご自分の人生を、はさみチョッキンチョッキン、おしゃべりペチャクチャ、それにシャボンの泡泡、こんなもので浪費していらっしやる。あなたなんか死んでしまえば、もともと居なかったも同然だ。」

このように、灰色の男は、人生の虚無感に沈んでいる人を更にグーの音も出ない程、まずは打ちのめすのである。正にモモと正反対である。灰色の男は、このようにフージー氏を打ちのめしておいてから、やおら次のように話を持ちかけて自分に気を持たせ、思うつぼにはめて行くのである。

「あなたがお望みの通り、もしもあなたにまともな生活を送る時間さえあれば、あなただっただけ全く別人になるでしょうにねえ。」

貯金を始めようとする場合、出費項目を逐一検討して無駄遣いを洗い出し、それを貯金にまわそうとするように、この灰色の男は、フージー氏に1日24時間の時間の使いみちを逐一問いただし、まずはそれをそのまま項目ごとに店の鏡の上に書き出して行くのである。しかもそれは、彼の最近の1日分の時間数ではなく、彼の今までの人生42年分の総計として、更に手のこんでいることに、それを秒に換算して、頭がこんがらがらがるような大きな数字をならべて、フージー氏に考えるいとまも反論するすきも与えず、たて板に水を流すごとくすらすらと書き上げて行くのである。(カッコ内は本稿の筆者補足)

(1日で)	(42年間で)
睡眠 (8時間)	441,504,000 秒
仕事 (8時間)	441,504,000 秒
食事 (2時間)	110,376,000 秒
母の世話 (1時間)	55,188,000 秒
セキセイインコの世話 (15分)	13,797,000 秒
買物ほか (1時間)	55,188,000 秒
友人、合唱ほか (3時間)	165,564,000 秒
秘密 (ダリア嬢とすごす時間 30分)	27,594,000 秒
窓辺でぼんやり考える (15分)	13,797,000 秒
合計 (24時間)	1,324,512,000 秒

「この合計がつまり、あなたが今までに失ってしまった時間なのです。これに対して何か言うことはありますか、フージーさん。……じゃあこんどは、あなたのこれまでの42年間のうちどれだけ残っているか、見てみま

しょう。ご存知の通り、1年は31,536,000秒、これ掛ける42で1,324,512,000秒。

1,324,512,000 秒 (42年間の総持ち時間)

－ 1,324,512,000 秒 (42年間で浪費した時間)

---

0,000,000,000 秒

この数字は、フージー氏が過去42年間で秒で算出し、それから彼の人生42年間分の秒数を引いただけのことであるから、ゼロになって当然なのである。しかし、このゼロの羅列は、彼がそこはかとなく懐いていた彼自身の人生に対する虚無感を彼に迫真性をもって再認識させるに、極めて有効だったのである。彼は、彼の人生の総決算をゼロの羅列で見せつけられて、改めてがく然とする。

「こんなやり方をしていることはもうできないとは思いませんか。」と、外交員ナンバーXQY / 384 / bは、こんどはおだやかな口調で言いました。「節約を始めようという気にはなりませんか。」

こうしていよいよ、灰色の男はフージー氏から時間をだまし取る仕事にとりかかる。この灰色の男のこれからの計算が、いかに不合理、かつでたらめであっても、今のフージー氏には、それを見やぶる能力も、心のゆとりもない。とにかく、この灰色の男の言うことを要約しておこう。いわく、もしもフージー氏が今から20年前から1日2時間節約して、それを貯蓄しておいたとすれば、それは今では52,560,000秒になっていたはずである。更に今から先20年間、つまり彼が62歳になるまで、同じように1日2時間節約して貯蓄しておけば、これの2倍、つまり105,120,000秒たまるはずだという。(しかし、過去20年間で使ってしまった時間を今さらどうやって貯蓄できるというのか。それは不可能だ。そんなことは一切おかまいなし。)この外交員はたて板に水を流すごとくまくしたてる。いわく、彼の時間貯蓄銀行では、5年で倍の利子をつける、従って、フージー氏が62歳になる時には、つまり貯蓄を始めてから40年後には、彼が貯蓄した時間の総額は、 $105,120,000 \text{ 秒} \times 256$  (これは $2^8$ ) = 26,910,720,000秒 (なんとこれは853.3年余りに相当する!)になるというのだ。フージー氏はこの数字を見て、欲に目がくらむ。そんな彼の心を見すかして、灰色の男はうすら笑いを浮かべて言う。

「これは、あなたがもともと持っている一生涯の10倍以上の時間ですよ。しかもこれが、何と1日たった2時間の節約でたまるのですよ。よく考えてごらんください。もうかる貯蓄ではありませんか。」

「まったくその通りです。」と、フージー氏は肩をガックリ落として言っ

た。「全く疑いもなくそうです。もっと前から節約し始めていなかったなんて、俺はなんて不しあわせな男だろう。今はじめてはっきりわかりました。白状します。——私はもう絶望的です。」

「そんなことはありませんよ。」と灰色の男はやさしく言った。「遅すぎることはありません。あなたがお望みなら、今日からでも始めることができますのですよ。それはやりがいのあることだということが、きっとおわかりになることでしょう。」

「むろんやりましょう！」と、彼は声を大にして言った。「私はどうすればいいのですか。」<sup>(21)</sup>

という具合にして、フージー氏は灰色の男に完全にいいくるめられてしまったのである。これは、灰色の男たちが一般庶民をだます時に使う典型的な手だったのである。

これと同じようなことが、この大都会の多くの人々にも起きていた。あの左官屋のニコラも同様であった。モモの目の前でニノと派手な喧嘩をやらかし、和解したあの日の後、しばらく顔を出さなかったので、モモは心配になって、ニコラの所へ訪ねていく。そして彼の話を聞く。

「なあおまえ、今おれに何が起きていると思う！ 今は昔とは全然ちがうんだ。時代は変わるんだよ。おれが今いるずーっとむこうの方じゃ、仕事の進みぐあいがるつきり変わってしまったのさ。まるで悪魔みたいな早さだ。おれたちは毎日のようにまるまる1階積みあげて行く、しかも来る日も来る日もそうなんだ。昔はこうじゃなかった。おまけに何もかも予め決められていて、手ひとつ、指1本動かすのさえもちゃんと決められちまっているのさ。(中略) おれが言うことなんか、何もかも全く無意味だよな。(中略) ごらんの通りさ、モモ、おれは少し飲みすぎちまっているんだ、白状するよ。今ではこれもしょっちゅうなんだ。こうしないと、今おれたちがやっていることに耐えられないんだよ。あんなことはまじめな左官屋の良心に反することだ。モルタルにやたらとたくさん砂を入れすぎるのさ。あれじゃ、4、5年しかもたないなあ。その頃にやあ、せきひとつただけでもつぶれちまうぜ。何もかもインチキ工事さ、卑劣きわまるインチキ工事さ。でもそんなことはまだましな方さ。一番ひどいのは今おれたちがむこうの方で建てているビルさ。あんなものは……あんなものは……あんなものは……あんなものは死人用の穴ぐらさ！ 考えただけでも胃がキリキリ痛いよ。でも、そんなことが俺に何の関係がある？ 俺は金をもらう、

それでおしまいさ。まあなあ、時代は変わるものさ。昔の俺はこうじゃなかった。昔はなあ、人に見てもらえるようなものを建てて、そしてその自分の仕事を誇りに思っていたものさ。今じゃ……。いつかたっぷりお金がたまったら、こんな仕事はおさらばして、何か別のことを始めるよ。」<sup>(22)</sup>

ニコラにはもはや、昔のあのきっぷのいい生き生きした元気はなかった。ニコラは、灰色の男たちに直接話しかけられてまるめこまれた形跡はないけれども、彼らに侵された社会の風潮に抗し切れず、心ならずも灰色の男たちに支配されてしまっていたのである。

安居酒屋の亭主ニノも似たりよったりであった。ニノは、店の賃貸料は高くなったし、赤ちゃんも大きくなってくれば生活費もかさんでくる、妻リリアーナにももっと楽をさせてやりたい等々、世間のお父さんたちなら誰でも考えそうな理由を挙げて、一杯の安ぶどう酒をかこんでほんかわ一晩中とぐろをまいて語り合い、一晩中店を占領してしまう、もうからない常連客を客払いしてしまい、もっともうかる店にしようかと企てたのである。結局彼は、その居酒屋をたたんで、時代に合わせて、「スピード料理店 ニノ」を新築開店して大成功をおさめたのである。モモが訪ねて行って話を聞こうとしても、まともに話を聞くひまはなかった。ニノはレジに立ち続け、後から後から次から次へとやってくる客に、レジスターのキーをたたき続け、代金をもらったりおつりを渡したりするのに忙しく、モモの話し相手をしているひまさえない程、大繁盛していたのである。食べ物は多すぎるほど食べさせてもらっても、とは言ってもその代金はジジのつけだったが、モモの心は決して満たされることはなかったのである。こうしてニノもニコラと同様に、時代の風潮に押し流されることによって灰色の男たちに完全に制圧されてしまっていたのである。

灰色の男たちはとうとうモモにさえも手を出してきたのである。ある日、モモは自分が住んでいる円形劇場の廃墟にひとつの人形がおちているのを見つける。その人形は赤いドレスを着て、皮のハイヒールをはいた美しい等身大の人形であった。しかもその人形は、指でつついてみると、キーキー声で人間の言葉を話すのである。

「こんにちは、あたしはビビガール、完全無欠なお人形です。」

「あたしはあなたのものよ。あたしを持っているとみんながあなたをうらやましがるわ。」

「あたし、もっといろいろなものが欲しいわ。」

しかし、何回つついてみても、この人形はこれしか言わないのである。こ

の人形ではモモにとっては何の魅力もない。遊び相手にもならない。そこへ、灰色の男が車で乗りつけて来て、モモにその人形相手のママごと遊びのし方を教え、その人形に着せかえるいろんなドレスやらハンドバッグなど、ありとあらゆる物を車のトランクから取り出してきて、それも全部モモにくれると言う。普通の子供たちの場合であつたら、灰色の男たちは、この手で子供たちの心をとらえ、あとは思うつぼにはめることができたのであろう。しかし、モモの場合にはこの手は何の役にも立たなかつたのである。面をくらつたこの灰色の男は、次の手として、モモを説得したり、おどしたり、すかしたりしはじめる。

「いいかね、モモ——私が言うことをよく聞くんだよ！」と、ついに彼は始めた。そんなことならモモは今までずうっとやってきたことだつた。しかし、この人に耳を傾けることは、今までの誰に耳を傾けるよりもむずかしかつた。今までだつたら彼女は、いわば完全にすっぽりと相手の心の中に入りこんで、その人の言うことも、その人の真心も理解できたのである。しかし、この訪問者の場合、彼女にはとにかくそれがうまく行かなかつた。何回そうしようとしてみても、そこには誰も居ないかのように、暗やみと空虚の中へ落ち込んで行くみたいな感じになるのであつた。こんなことは今までに一度もなかつた。

モモは、人の心の真実を感じ取ることのできる少女である。モモは、この訪問者（灰色の男）は本来は存在しないもので、その心は空虚であることを見ぬいていたのである。このことは、モモの質問に対するマイスター・ホラの説明でも明らかだ。

「あの人たちは、いったいどうしてあんなに灰色の顔をしているの。」とモモは、めがねでむこうを眺めながらたずねました。「死んだもので命をつないでいるからだよ。」と、マイスター・ホラは答えました。「おまえも知っているだろう、彼らは人間の生存時間を糧にして存在しているんだよ。しかし、この生存時間は本当の所有主から切りはなされると、文字通り死んでしまう。人間は一人一人自分の時間を持っているからね。だから、その時間は、本当の持ち主が本当に持っている間だけ生きているのだよ。」

「それなら、あの灰色の男たちは人間ではないんですね。」

「そうなんだ、彼らは人間の姿をしているだけなんだよ。」

「そんなら彼らは何なの？」

「実際はねえ、彼らは無なんだよ。」

「それで、彼らはどこから来たの？」

「人間たちが彼らに発生する機会を与えるから、彼らは発生するのだよ。そして今では、人間たちは自分たちを支配させる機会さえ彼らに与えている。」<sup>(23)</sup>

ルドルフ・シュタイナーにおいては、灰色は死の色である。これはこれとして、話を再びモモと灰色の男との出会いの場にもどそう。

「人生で大切なことは、たった一つしかない。」と、男は続けて言った。「それは何かに成功すること、ひとかどのものになること、資産を持つことだ。他の人より成功し、他の人よりえらくなり、他の人より金持ちになった人には、その他のものは何でもひとりでにころがり込んでくるものだ。友情だって、愛だって、名誉だって、その他何だってそういうものなんだ。おまえは、おまえの友だちを好きだと思っているよな。ではひとつ、このことについて事実在即してよく考えてみようじゃないか。ここでまず最初にこういう疑問がわいてくる。君が居るからといって、君の友だちはいったいどんな利益を得ているというのだ？ 彼らに何の役に立っているというのか？ いいや、そんなことはない。では出世するのに手助けになっているのか？ 金もうけの手助けになっているのか？ えらくなる手助けになっているのか？ あきらかにそんなことはない。では彼らが時間を節約しようとして努力しているのを支えてやっているのか？ その反対だ！ 君は何もかも彼らの邪魔をしているのだ。君は彼らの足かせにすぎない、君は彼らの前向きの努力をだいなしにしているにすぎないのだ！ たぶん君は今までこのことに気がつかなかったのだろうけれどなあ、モモ。いずれにせよ、君はただここに居るだけで君の友だちに損害を与えているのだ。そうさ、君は実際は、君にその気はなくても、君の友だちの敵なのだ！ それなのに君は友だちを好きだというのか。(中略) だから我々は君の友だちを君から守ろうとしているのだ。だからもし君が本当に彼らを好きのなら、君は我々に協力してくれるね。我々は彼らを何か成功させてやろうと思っている。我々こそ彼らの本当の友人なのだ。君が友だちの邪魔をして彼らが大切なものを獲得できなくしているのを、我々はもはやそばでだまって見ていることは出来ないのだ。我々は、君に皆をほうっておいてもらいたいんだ。いいね、これらの美しい物は全部君にくれてやるから。」

「我々って誰？」と、モモは口びるをワナワナふるわせながらたずねました。

「我々は時間貯蓄銀行の行員だ。」と灰色の男は答えた。「私は外交員 BLW /

553 / C という者だ。私個人としては、君によかれと思っているんだよ。というのは、時間貯蓄銀行はなかなか手ごわい相手だからね。(中略) むだな抵抗はやめたほうがいいよ。君は我々にはかないっこないんだから。」

モモは負けていなかった。

「それならあなたを好きな人は一人も居ないの？」とモモは、ささやくような小声でたずねた。

灰色の男は背中をまるめて、少しガックリと肩をおとした。それから彼は、灰色の声で答えて言った。「言っておくけどな、君みたいな子供と私は今までに一度も会ったことはなかった。本当になかった。私はたくさんの人を知っているけどなあ。君のような質の人がもっとたくさんいるとすれば、我々は我々の貯蓄銀行をすぐにたたまなければならなくなるだろうなあ。そして我々自身も消滅しなければならなくなるだろうね。——だっていったい我々は、何を糧として生きていけばいいというのか？」

今、モモはどうとう彼の本音を聞いたのである。「我々は正体を知られずにいなければならないのだ。」その声は遠くから聞こえてくるように思われた。「我々がいることも、我々がしていることも、誰にも知られてはいけないのだ……我々は誰の記憶の中にも残らないように気をつけているんだ……我々は人間に気づかれずにいる限りでのみ、我々の仕事に専念できるのだ……それは、人間たちから彼らの生きる時間を1時間、1分、1秒としぼり取るむずかしい仕事なんだからな……人間が節約した時間は、人間にはなくなってしまう……我々がむしり取って自分のものにするのさ……我々はその時間を蓄えておく……我々には時間が必要なんだ……我々は時間に飢えている……ああ、君たち人間ときたら、君たちは時間とは何たるか、知らない……しかし我々は、我々はそれを知っている……我々は君たちを骨の髄までしゃぶりつくすのだ……我々にはもっとたくさん時間が必要だ……もっと、もっとだ……なぜなら我々の数はどんどん……ますますどんどん……増えてくるからだ……」<sup>(24)</sup>

こうして灰色の男は、モモによって正体を見破られたのみならず、思わず知らず自ら自分の正体を白状してしまったのである。

その数日後のことであった。道路掃除夫ベッポは夜勤作業を割り当てられ、ごみ収集車が街から集めてきたごみを、郊外のごみ捨て場におろす作業に従事していた。作業は夜中になってやっと終わり、仕事なかまは皆帰って行った。けれども、ベッポじいさんは疲れはてていたため、一人そこに腰をおろし、ひ



と休みしてから帰るつもりでいたのである。ところが、ついうとうと眠りこんでしまった。ふと目を覚ますと、丁度その時、ごみの山の上で灰色の男たちの法廷が開かれるところだった。

「ナンバー BLW / 553 / C、重罪裁判の法廷の前に進み出よ。」

訴えられているのは、なんとモモの説得に失敗し、あまつさえ灰色の男たちの秘密を洗いざらい暴露してしまった、あの灰色の男であった。訴因は、

子供に時間を節約させるのは大人に時間を節約させるよりもむずかしい。だから子供に手を出すのは最後にせよというきびしい掟があるにも拘らず、彼は子供に手を出したということ、

更に、

彼らがやっていることを人間に知らせても、感づかせてもいけないという最も厳しい掟があるにも拘らず、彼はその秘密を暴露した、ということであった。ナンバー BLW / 553 / c は、この罪状をすべて認め、情状酌量を懇願して言う。

「あの子が私の話を聞く聞き方は、私の心の中を全部おびき出してしまふような聞き方なのです。どうしてああいうことになったのか、私自身にもわかりません。」

「君の弁解なんか我々に関心はない。(中略) 我々の掟は破られることも例外もありえない。だがともかく、その不思議な子には我々も少し気をつけることにしよう。で、その子は何という名前か？」

「モモです。」

「男の子か女の子か？」

「小さな女の子です。」

「住んでいる所は？」

「円形劇場の廃墟の中です。」

「よろしい、(中略) 被告、君はこの女の子が二度と再び我々に被害を与えることはないと信じてよろしい。そのために我々はありとあらゆる手をつくそう。心安らかにただちに刑の執行を受けよ。」<sup>(25)</sup>

こうしてナンバー BLW / 553 / C は、ベッポの目前で直ちに死刑を執行されたのである。死刑の執行は、彼がくわえている時間の花の葉巻を、彼の唇からむしり取るだけで済む。そうされると、彼はたちまち消滅してしまったのである。ベッポはしばらくの間、灰色の男たちが立ち去ったごみの山を、ぼう然と見つめているだけだった。遠くで塔の時計が夜中の 12 時を打った。ベッポは、

ハッと我に返り、モモの身に危険が迫っているのをさとり、おんぼろ自転車にとび乗り、無我夢中でペダルを踏み、円形劇場の廃墟へ向かった。

ちょうどその頃、モモはその廃墟の石段に腰をおろしていたのである。どうしたわけか、この夜にかぎって、どうしても眠りにつけなかったのである。この時、モモの足に何かが触れた。それは一匹のカメであった。名はカシオペア。言わんとすることが、背の甲羅に文字となって淡く光る不思議なカメであった。しかもこのカメは30分先まで、起こることすべてを知っているカメであった。このカメは、マイスター・ホラがモモを保護するためにモモのところに遣した使者だったのである。モモはこのカメに導かれて、灰色の男たちのきびしい搜索の手をくぐりぬけ、町の郊外にたどりつき、更にそこから《一度もない小路》という名の小路を通りぬけて、更にその先の《どこにもない館》という名の館にたどりついたのである。この館の主はマイスター・ホラ。彼がモモを灰色の男たちから保護してくれたのである。

灰色の男たちの搜索隊が車をつらねて円形劇場の廃墟に到達し、その廃墟の中を隅々まで搜索したのは、モモがカシオペアに導かれてその廃墟を後にした直後であった。モモがこの廃墟のどこにも居ないことを見とどけた灰色の男たちは、ただちに市中を搜索するためにこの廃墟を去って行った。一台の車に乗った2、3人の灰色の男たちが、モモがああ《一度もない小路》を渡り終わろうとしているところを発見し、その小路に車を乗り入れ、追跡しようとした。けれども、彼らの車は1メートルも前進することもできず、むざむざとモモを逃がしてしまったのである。なぜなら彼らはその小路の進み方を知らなかったからである。しかしともかく、彼らはモモがマイスター・ホラの館へ逃れたことだけは、確認できたわけである。

他方、ベッポじいさんが廃墟にたどりついたのは、灰色の男たちが市中へ散って行った後であった。円形劇場のまわりのおびただしい数の輪だちの跡、荒らされて散乱しているモモの部屋の中を見て、ベッポじいさんは、てっきりモモが灰色の男たちに捕えられ、連れ去られてしまったものと確信してしまったのである。

話をふたたび、マイスター・ホラの館にたどりついたモモにもどそう。モモは、マイスター・ホラの歓待を受け、時間の秘密をいろいろ教えてもらう。すべての人間の生涯時間の源は、マイスター・ホラのこの《どこにもない館》にあると言う。では彼自身がここで人間の時間を創っているのかという質問に答えて彼は言う。

「いやそうじゃないんだよ。私はただの管理人にすぎない。私の義務は、各々の人間に定められている時間を各々の人間に分け与えてやることなのだ。」

「それならあなたは、時間どろぼうたちが人間からこれ以上もはや時間を盗むことができないようにしてやることだっごく簡単に出来るでしょう？」と、モモはたずねた。

「いや、それは出来ない。」と、マイスター・ホラは答えた。「というのは、自分の時間をどう使うかは、人間自身が決めなければならないことだからだ。私がしてやれるのは、彼らに時間を分け与えることだけなのだ。」<sup>(26)</sup>

また彼は、灰色の男たちが彼のこの《どこにもない館》に足を踏み入れることは絶対に出来ない、とも言う。従って、灰色の男たちが、個々の人間に分配される以前のこの館にある時間に手をふれることは絶対に出来ないのである。灰色の男たちが手を出したり、盗んだりすることができるのは、マイスター・ホラの館をはなれ、個々の人間に分配されてしまった生活時間だけなのである。それ故、「時間は生活である。」という命題で定義されていたのである。

これはこれとして、話を再びマイスター・ホラの館にもどそう。そんな話を聞いた後、モモは更に自分の時間がうまれ出てくる現場につれて行ってもらう。そこで彼女が見たのは、黄金のドームの下、底知れぬ池、そこにさしこむ黄金の光、その光に呼び出されるようにその池の底から生じてきては散って行く、表現できない程美しい《時間の花》であった。耳を傾けていると宇宙からさし込んでくる黄金の光は無数の音楽であった。更に耳を傾けているとその音楽は言葉であった。彼女はこの音楽を言葉として、子供たちやベッポやジジなどの友人に伝えたいと言う。しかしその宇宙時間の音楽が熟して、彼らに伝えることのできる言葉になるためには、地球が太陽のまわりをひとまわりするだけの時間、つまり1年間の時間が必要だという。こうしてモモは、マイスター・ホラの《どこにもない館》で、1年間の眠りについたのである。

モモが居なくなったこちらの世界では、灰色の男たちにとっては向かうところ敵はなく、侵略は破竹の勢いで進んだ。

灰色の男たちが観光ガイドのジジを攻略するのは簡単だった。モモが行方知れずになった後まもなく、新聞に「最後の真の語り部」という題のジジを推賞するかなり長い記事が載ったのである。その後この円形劇場の廃墟には、多くの観光客が押しかけるようになる。ジジは旅行社の専属観光ガイドになり、分きざみで日課をこなさなければならなくなった。何か月もしないうちに彼は円

形劇場に立つ必要はなくなった。ラジオ、テレビに出演するようになり、何百万人もの視聴者を相手に話を語り、ガッポ、ガッポとお金をもうけるようになったのである。廃墟の近くの荒屋に住んでいる必要もなくなり、金持ちや有名人ばかり住んでいる新興住宅地区の近代的な大邸宅に引っ越して、名もジジを改めジロラモと名をのるようになったのである。3人の有能な女秘書を雇い、運転手つきの高級車で朝から夜までびっしりとつまったスケジュールに追い回される芸能界の大スターにのしあがったのである。しかし、有名になり、もてはやされ、金持ちになるにつれ、彼の空想力は逆にますます枯渇していったのである。窮地に追い込まれたジロラモはついに禁じ手を使ってしまった。モモのためだけに作っておいた話まで、金もうけのために使い始めたのである。その話の最後の一つまで使いつくした時、彼の空想力は完全にからっぽになってしまったのである。それでも彼は成功に見はなされるのが恐ろしくて、それからというものは、以前に語ったことのある話まで少し手なおししながら語り続けた。もはや彼は真の空想の語り部ではなく、いわば偽の空想話を、それと知りながら語るうそつき語り部となったのである。彼は自分に絶望し、心はすさむ一方であった。しかし、そうしてまでもなお彼は自分の成功にしがみつき続けた。昔の夢見るジジは、うそつきジロラモになりはてたのである。それでも彼は、マスコミによって、「おどろく程多産」な人と、称賛されつづけたのである。

ここまで落ちてしまう前、まだわずかなりとも昔のジジらしさをとどめていた頃、一大決心をして立ちなおろうとしたことはあった。灰色の男たちのことを洗いざらい暴露し、モモの捜索に協力してくれるよう、視聴者に訴えようと決心したのだ。その夜も明けきらないうちに、ジロラモは起きて机に向かい、この計画を実行するためにメモを書こうとしていた時、電話のベルがけたたましく鳴った。

「やめておけ！」とその声は言った。

「おまえのためを思って忠告するのだ。(中略) おまえが今ここでもくろんでいることは、おれたちには気に入らないのだ。おとなしくして、そんなことは放っておけ、いいか？……あわれなジジ、おまえは相変わらず空想家だな。以前のおまえはあわれなジジの仮面をかぶった王子ジロラモだった。そして今は何だ？ 王子ジロラモの仮面をかぶったあわれなジジだ。それにもかかわらず、おまえは我々に感謝しなければなるまい、おまえの夢をすべてかなえてやったのは、他でもない、この我々なのだからな。」(中略)

「おまえたちはモモをどうしたんだ？」

「そんなことにおまえのそのこんがらがったちっぽけな頭をしぼるのはやめとけ！ おまえに彼女を助けることなんか出来はしないのだ。おれたちのことを皆にばらしたって何にもならないのだ。そんなことをすれば、おまえのすばらしい成功が、やって来たときと同じ速さで、逃げて行けさ。もちろん決心するのはお前自身だ。英雄を気どったあげく身を滅ぼしたって、おまえがそうしたいというならおれたちはとめはしない。しかし、おまえがそんなに恩知らずでも、我々がおまえにこの先も援助の手をさし伸べるなどとは思わなよ。やっぱり、金持ちで有名でいる方が、ずーっとましというものじゃないのか？」(中略)

「いいことを教えてやろう、そんなに深刻に考えるのはよせ。実際自分には何の関係もない、そう考えていればおまえはこれまで通りすてきに暮らしていけるのだ。」

「それはそうだ。」と言って、ジジはぼんやりと目の前に視線をおとした。

「そう考えれば……。」

それから、受話器からはガチャンという音がして、ジジも受話器を置いた。彼は大きな書き物机にうつ伏せになり、両腕で頭をかかえた。そして身を震わせて、声もなくすすり泣いた。<sup>(27)</sup>

こうしてジジは灰色の男に踊らされたあげく脅迫されて、名声と物質的豊かさを失うことを恐れて、モモに対する愛まで喪失したのである。そしてこれ以後、彼は自尊心をも完全に失ってしまった。

他方、道路掃除夫ベッポをかたずけることは、灰色の男たちにとってそう簡単にはいかなかった。モモがいなくなったあの夜から、ベッポは仕事のない時間はいつも、この廃墟にやってきて、ひたすらモモの帰りを待っていた。ジジはもっともらしい理由をつけて反対はしたけれども、ベッポは不安と心配に耐えきれず、とうとう警察に捜索願を出す決心をしたのである。それでもためらったあげく、近くの交番へ入って行く。初めの頃はそのお巡りさんもベッポじいさんの話をまじめに聞いてくれる。その女の子の親は誰？ その女の子の戸籍はどこ？ その女の子の現住所は？ その女の子モモの苗字は？ 何を聞かれても、たとえベッポじいさんでなくても、明確に答えられるはずはない。

「身元調べはまああとにまわすとして、まず先に、いったいどんな事件なのか、それがどういう具合にして起きたのか、順序だてて話してくれ。」ということになって、ベッポじいさんは、例のわかりにくいトツトツとした話し方で、しかし真正直に、そもそもモモが現れた時から、モモの不思議な性



子を救い出そうと骨を折れば折る程、かわいそうにあの子の立場はそれだけつらいものになるのだぞ。あの子はなあおまえ、おまえのその悪あがきひとつひとつにつぐないをさせられることになるんだからなあ。(中略)おれの申し出というのは次のことだ。おまえが次の条件をのめば、我々はおまえにあの子を返してやる。その条件とはこうだ。おまえはこんりんざい、我々と我々の活動について誰にももらさないということだ。それからもう一つ、我々はおまえに、いわば身代金として、10万時間の時間の節約を要求する。(中略)これだけのことを承知するなら、2、3日中にここから出られるようにとりはからってやろう。承知できないのなら、おまえは永久にここに居ればいいし、モモは永遠に我々の手もとに居ることになる。よく考えてみる。こんな気前のいい申し出は今回一回限りだぞ。さあ、どうする？」

ベッポは二度なまつばを飲み、そしてかすれ声で言った。「承知した。」<sup>(29)</sup>

こうして、もう老人で思慮深く、堅固な人生観を確立していたベッポじいさんでさえも灰色の男に心ならずも屈伏させられてしまったのである。

灰色の男たちが攻略するのに一番手をやいたのは子供たちであった。子供たちは、モモが姿を見せなくなっても、モモはいつかきっと帰って来ると信じて疑わなかった。モモは、姿を消してから子供たちの心の中に確実に存在し続けた。そしてひまさえあれば廢墟に集まって来て、以前と同じように皆でいろいろな工夫をし、遊びに熱中していた。そのため、灰色の男たちは子供たちには直接には手を出せなかったのである。そこで彼らは、親たちや市のお偉方など、大人をあやつることによって子供たちを支配しようと手を回したのである。その結果、親たちはだんだんと忙しくなってきた、自分たちの子供たちの世話をするひまさえなくなってきたのである。親たちは子供たちに高価なおもちゃを与えたり、お小遣いを多く与えたりするだけで、朝から晩まで働くだけで子供はほったらかし、子供たちとの心のかよひあう会話はだんだんとなくなっていったのである。この不満から逃れようとするかのように、子供たちはますます多く、この廢墟に集まってくるようになっていったのである。しかし彼らの中には遊び方を知らず、他の子供たちの遊びを邪魔するおちこわし屋も増えてきたのである。こういう時流の中、市のお偉方の中には次のような意見を堂々と述べる者も出てきたのである。

「なんとかしなくちゃいかん。」と誰かが言いました。「ひとりきりに放置されている子供がだんだん増えてきているのは困ったことだ。しかし親

たちを非難することもできない。なにせ、現代生活では子供をかまっている時間は親にもないからだ。だからここは、市の行政当局がその対策を考えなければならないのだ。」

「監督が行きとどいていない子供は、不良化し、犯罪者になる。」と言う者もいた。「こういう子供は全員拘束するよう、市の行政当局が手をうたなければならない。施設を作って、そこで彼らを教育して有能で役立つ社会人に育てなければならない。」

そしてまたこういう意見を述べる者もいた。「子供たちは未来の人的資源である。未来はジェット機と電子頭脳の時代である。こういう機械を使いこなすためには、たくさんの専門家と専門労働者が必要になる。それなのに我々は、子供たちをあすの世界のために教育するどころか、彼らの貴重な年月を何の役にもたたない遊びに浪費するがままに放置している。これは我々の文明にとっては恥辱であり、未来の人類に対する犯罪である！」<sup>(30)</sup>

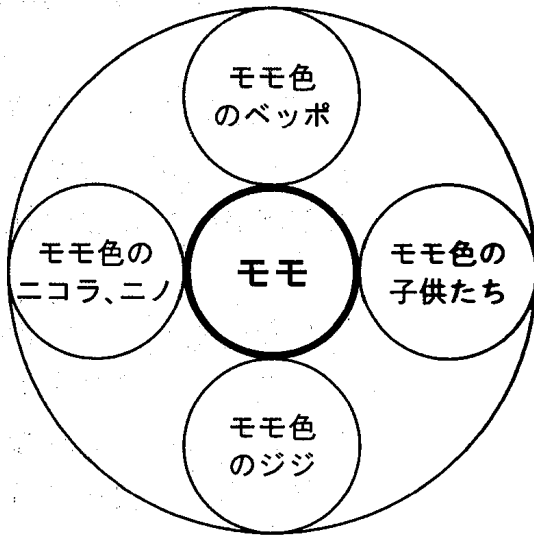
こういう世論によって、市の各地区ごとに《子供の家》が作られ、めんどうを見る親のいない子供たちは全員、そこに収容されてしまったのである。道路や緑地帯で遊ぶことは厳禁になり、見つければただちに近くの《子供の家》に連れて行かれた。モモの友だちもこの新しいきまりから逃れることはできなかった。そしてこの《子供の家》では、自分たちで新しい遊びを工夫して遊ぶことなど許されるはずはなかった。ここでは遊びでさえも監督者によって決められていて、しかもその遊びときたら将来の何かの役に立つことを教えるのに役立つものばかりであった。

こうして子供たちさえも一人前の時間節約家にさせられてしまった。これと同時に、モモが姿を消したこちら側の世界は完全に灰色の男たちに制覇されてしまったのである。もはや円形劇場の廃墟で遊ぶ子供は一人も居なくなり、ここへモモを訪ねてくる大人も一人も居なくなったのである。廃墟は人々から忘れ去られ、人気もなくひっそりと松林の中にたたずんでいた。

ここで、以上の灰色の男たちや、フージー氏その他の灰色の男たちにより洗脳された人々の言動から灰色の男たちの時間の本質を明確にする作業にとりかかることにしよう。灰色の男たちに制覇され、洗脳された人々を、その名の前に「灰色の」という形容詞を冠して表わすことにする。そうすれば、モモが姿を消したこちら側の世界は、第1図で示した世界から、第6図で示す世界へ変わったことになる。



第1図



第6図

	灰色のベッポ	
灰色のニコラ、ニノ、フージー	<b>灰色の男たち</b>	灰色の子供たち
	灰色のジロラモ	

既に第1章で定義されていた通り、時間は生活である。これを図式化すれば、次のようになる。第8図は、第7図に等しい。

第7図

	灰色のベッポの時間	
灰色のニコラ、ニノ、フージーの時間	<b>灰色の男たちの時間</b>	灰色の子供たちの時間
	灰色のジロラモの時間	

第8図

	灰色のベッポの生活	
灰色のニコラ、ニノ、フージーの生活	<b>灰色の男たちの時間</b>	灰色の子供たちの生活
	灰色のジロラモの生活	

これもまた第2章で既に述べた通り、生活は、それを営む当人の能力や価値観や人生目標によって決定される。つまり、日常の生活は目に見える外面（表側）であり、能力や価値観はそれを決定する内面（裏側）の原理である。従って、第9図は第8図と表裏関係にある同一のものである。

第8図（外側）

	灰色のベッポの生活	
灰色のニコラ、ニコラ、フージーの生活	<b>灰色の男たちの時間</b>	灰色の子供たちの生活
	灰色のジロラモの生活	

第9図（内側）

	灰色のベッポの能力、価値観	
灰色のニコラ、ニコラ、フージーの能力、価値観	<b>灰色の男たちの時間</b>	灰色の子供たちの能力、価値観
	灰色のジロラモの能力、価値観	

=

灰色の男たちは、すべてにおいてモモとは正反対である。モモは人の話をただ聞くだけで、概して寡黙であった。それにもかかわらず、モモは行方不明になった後にも、人々の心の中心に居続けた。その存在感は絶大であった。

灰色の男たちは多弁である。しかもその弁は、時には相手の存在根拠を真向うから否定する冷たい罵声であり、時には相手の存在を脅かす恐喝であり、時には相手をまるめこむ甘い嘘である。そして、灰色の男たちの存在は、彼ら自身がよく知っている通り、人に知られては具合の悪いものであり、時間貯蓄を勧誘する外交員として訪問し、貯蓄の成約を取りつけても、彼らが立ち去ってしまえばそういう人が訪ねてきたことはたちまち忘れ去られてしまったのである。つまり、人々の心の中には存在しなかったのである。しかし、彼らとの約束だけは、自分自身の自発的な決心として自覚され、しっかりと人々の心の中に残るだけだったのである。

モモは何も要求しない。人々に話を聞いてやるだけである。これによって、その人が本来潜在的に持っている能力を目覚めさせ、その人本来の徳を育ててやるだけである。つまり、モモが廢墟に、つまりこの世にやってきたのは、人に徳としあわせを与えるためだけだったのである。それに対して灰色の男がこの世にやってきた真の目的は、人々から時間を欺し取り、人々を死に到る病におとし入れるためだけであった。

モモの時間は心の中にあるもので、その本質は数量としてはとらえられない生活の質にあった。それに対して、灰色の男たちが問題としている時間は、人々の日常生活から節約して切り出される時間で、秒、分、時間、日、年として、

つまり数量として客観的に把握される時間なのである。このことは、灰色の男たちがフージー氏をだましこむ時使った手口に、典型的に表わされていた。もし彼が毎日2時間ずつ時間を節約し、それを彼らの時間貯蓄銀行に預けておけば、今から20年後、つまり彼が62歳になれば、それは元利合計26,910,720,000秒（これはなんと853年余りに相当する）になると言う。そして、あなたはこれだけ莫大な時間の大家になるのだ、と言う。フージー氏は、欲に目がくらんでしまったのである。

灰色の男たち自身、物質的な価値の信奉者でもある。このことは、灰色の男BLW / 553 / cが、モモに対して、思わず知らずむきになって垂れたお説教に明解に言い表わされている。

人生で大切なことはたった一つしかない。それは、何かに成功すること、ひとかどのものになること、お金持ちになることだ。他人より成功し、他人より偉くなり、他人よりお金持ちになった人には、その他のものは何だってひとりでにころがり込んでくるものだ、友情だって、愛だって、名誉だってそういうものだ。」<sup>(31)</sup>

「他人より成功し、他人より偉くなり、他人よりお金持ちになった人には、その他のものは何だってひとりでにころがり込んで来るものだ、友情だって、愛だって、名誉だってそういうものだ。」という言葉の真偽は別として、灰色の男たちが肯定的に主張する人生の大切なもの、つまり人生の価値は、これひとつしかないのである。友情や愛や名誉などは二の次、つまりはどうでもいいものなのである。簡単に言ってしまうと、時間を節約してその節約した時間を我々によこせ、そうすればおまえは人生で一番大切なお金をよりたくさん手に入れることができるのだ、ということである。しかも彼らが吹き込むこの価値は、「他人よりも自分がより多く……」という自他分離に基づく利己的な価値観であり、常に「他人よりも自分がより多く (mehr) ……」というとどまることを知らない一方向的数量増大主義的価値観なのである。(付点筆者)

このような灰色の男たちの価値観に洗脳されてしまった人々、すなわち灰色のフージー、灰色のニノ、灰色のニコラ、灰色のジロラモ、灰色のジジ、灰色の子供たちは、どんな能力を（ここではこれを「徳」とは言わずに「能力」と言っておこう）身につけ、どんな生活をして、どんな価値を実現したのか、つまりどんな時間を実現したのか、これを図で表わせば、第10図になる。これが灰色の男たちの時間の本質である。

第9図

	灰色のベッポの能力、価値観	
灰色のニノ、ニコラ、フージーの能力、価値観	<b>灰色の男たちの時間</b>	灰色の子供たちの能力、価値観
	灰色のジロラモの能力、価値観	

第10図

	更に速く 更に多く 仕事をする	
更に成功し、 更に多くお金 をもうける	<b>量</b>	将来のため 更に多く 強制的教育 に耐える
	更に多産に 更に有名に 更に裕福に なる	

それ故、結局は第7図は第10図に等しいのである。

第7図

	灰色のベッポの時間	
灰色のニノ、ニコラ、フージーの時間	<b>灰色の男たちの時間</b>	灰色の子供たちの時間
	灰色のジロラモの時間	

第10図

	更に速く 更に多く 仕事をする	
更に成功し、 更に多くお金 をもうける	<b>量</b>	将来のため 更に多く 強制的教育 に耐える
	更に多産に 更に有名に 更に裕福に なる	

すなわち、灰色の男たちの時間の本質は量にあるのだ。この点で、灰色の男たちの時間は、モモの時間と本質的に異っているのである。

#### 第4章 時間を「盗まれる」、「取り返す」の意味

本稿第2章においては、質を本質とする時間観が提示され、第3章では量の本質とする時間観が提示された。ではエンデは、これら二つの時間観をどのような関係の中で見ていたのであろうか。

それは、この物語『モモ』の副題、『時間泥棒と盗まれた時間を人間に取り返してくれた子供についての不思議な物語』によっておおまかには始めから明示されているのである。では本章では、「時間を盗む」とはどういうことなのかを明確にしながら、エンデの時間観を確定することにしよう。

ここで話を、時間貯蓄の勧誘にやってきた時間貯蓄銀行の外交員、ナンバーXYQ/384/bと名のる灰色の男とフージー氏との交渉の場面にもどすことにする。この交渉のいきさつは本稿113ページから115ページにかけて詳しく引用しておいたので、ここではその先へ話をすすめることにする。フージー氏がこの外交員に、毎日2時間ずつ時間を節約し、それを時間貯蓄銀行に預ける契約をした時、フージー氏は、自分が62歳になれば彼の貯蓄時間額はその外交員の言う通り26,910,720,000秒(なんとこれは853年余りに相当する)になっていて、それを自由におろして使うことができると本気で思ったのであろうか。つまり、彼が1日にたった2時間ずつ時間を節約して行くだけで、20年後彼が62歳になった時、彼の寿命が853年ものびていると本気で信じたのであろうか。あの時のフージー氏の言動から見て、彼はひとかけらの疑念も持たずにそう信じたのである。彼は、この26,910,720,000という数字に目がくらんで、この節約の結果を現実に即して理解することはできなかったのである。

しかし、時間を節約した結果、それが数量としてどうなるかは、灰色の男たちがいちばんよく知っている。モモに正体を見やぶられ、あまつさえ自ら自分たちの秘密を白状してしまった灰色の男BLW/553/cは、放心状態で次のように言っている。

……人間が節約した時間は、人間にはなくなってしまう……我々がむしり取って自分のものにするのさ……我々はその時間を蓄えておく……我々には時間が必要なんだ……我々は時間に飢えている……(中略)……我々は君たちを骨の髄までしゃぶりつくすのだ……<sup>(32)</sup>

つまり、フージー氏が62歳になった時、彼が所有しているはずの26,910,720,000秒という彼の時間資産はなんにもなくなっているのだ。なくなったのは灰色の男たちに盗まれたからだ。それ故、灰色の男たちが、時間泥棒の張本人である。これは単純明解できわめてわかりやすい。しかし、この物語で問題としている

時間は、上のように数量としての時間ではない。「時間は生活である。」生活としての時間を考えなければならないのだ。これを「盗まれる」という局面で考える場合は、モモの価値観によって営まれていた生活が、灰色の男たちの価値観によって営まれるようになった生活によって何を盗まれたのか、何を奪われたのかを見なければならぬのである。

話を再び、フージー氏と灰色の男 XYQ / 384 / c 氏との交渉の場にもどそう。フージー氏は1日2時間ずつ毎日節約すると約束はしたものの、その節約のしかたが解らないのである。そこで、

フージー氏はたずねた。「では私はどうすればいいのですか。」

「おやおやお客さま。」とその外交員は眉を上げ、言った。「あなたは時間の節約の仕方くらいご存知でしょう。たとえば、もっと急いで仕事をして、余計なことは一切はぶく。一人のお客様に半時間もかけないで、15分でかたづける。時間を取るおしゃべりは避ける。年老いたお母さんのところで費やす時間を半時間に縮める。いっそのこと、安くてよい老人ホームに預けてしまうのが一番いいですよ。そうすれば、それだけで1日まる1時間も節約できますからね。何の役にも立たないセキセイインコを飼うことなんか、およしなさい。ダリアさんの所へ行くのは、どうしても行かなければならないとしても、15日に1度にしなさい。1日15分間もその日のことを考えるのは、およしなさい。そして特に、歌をうたったり、読書をしたり、あなたのいわゆる友人と称する人々と一緒に貴重な時間を浪費することはおやめなさい。ついでにお勧めしておきますが、あなたのお弟子さんを管理するために、店に大きいよい時計を掛けておきなさい。」

「わかりました。」とフージー氏は言った。「そんなことなら全部することができます。」<sup>(33)</sup>

フージー氏は、約束したことを忠実に実行した。その結果、彼はどう変わったか。ジジは、彼に会った時の彼の印象をベッポに次のように嘆いて語っている。

「……とにかく彼はすっかり人が変わりはてていてねえ、とっても神経質で、とっても無口で、とっても無愛想になっていたよ。昔は彼はいいやつだったのになあ。歌をうたうのは上手だったし、何ごとについてもしっかりとした自分の考えを持っていた。ところが急に、彼にはそういうことをしている時間がなくなったのさ。彼はもはや、彼自身の幽霊にすぎない。もはやあのフージーなんかではない。」<sup>(34)</sup>

幽霊すなわち亡者、亡者すなわち死者、死者すなわち心を奪い去られた人。母親の介護をほとんどしなくなったフージー氏。身体障害者のダリア嬢の世話をほとんど見なくなったフージー氏。セキセイインコを飼うのをやめてしまったフージー氏。すなわち他者を愛する心をほとんど失ってしまったフージー氏。床屋であってもこの世の中で自分は唯一無二のかけがえのない重要な存在であるという信念を失ってしまったフージー氏。20年後にとてつもない夢のような希望を持ったはずなのにひどく神経質で無愛想なフージー氏。灰色の男と会う前から空想力などとっくの昔になくしてしまっていたのかもしれない42歳男のフージー氏。こんなフージー氏は、ジジから見れば、心のある人には見えなかったのである。ジジから見れば、フージー氏は、亡者であり幽霊だったのである。つまりこれが、モモの側から見た灰色の男たちの時間・生活・心の本質だったのである。フージー氏に起きた変化と同じような変化は、灰色の男たちに侵された人々全員に起きた。

では、左官屋のニコラはどうなったのか。モモが会いに行くと、彼はまだ仕事から帰っていない。夜中になってやっと飲んだくれて帰ってくる。そして愚痴をこぼす。ビル建設工事の工程が悪魔みたいに早くなった。作業は何もかも予め決められていて、手ひとつ、指一本動かすのさえ決められている、という。要するに、作業がすみずみまで管理されていると、苦情を言っているのだ。彼のように、腕のいい左官屋として、独立独歩仕事をしてきた人には、熟練の個人的な術が封じこめられてしまう組織的に管理化された仕事は苦痛そのものである。それだけではない。当世行われている工事は卑劣きわまりないインチキ工事で、彼のように良心的な左官屋にはとうてい耐えられない、酒でも飲まなければやっていけない、と言う。モルタルに砂を入れすぎることくらいはまだましな方で、彼が今建てているビル工事は最悪だ、あんなものは、死人用の穴ぐらだと、悲憤慷慨し、胃の痛みを訴える。そして、やけくそになって居なおる。「だがな、そんなこと俺に何の関係がある？俺は金をもらう、それでおしまいさ。まあなあ、時代は変わるものさ。(中略)いつかたっぷりお金がたまったら、こんな仕事はおさらばして、何か別のことを始めるよ。」<sup>(35)</sup>フージー氏のように幽霊までに進んではいけないけれども、ニコラは良心の呵責に苦しむ病人だった。しかし、時代すなわち灰色の男たちに押し切られて、信念も良心も捨てて生きようと努力しているのだ。おそらく、人間関係も荒廃してしまっているのだろう。彼はモモに再会を約束して別れたけれども、彼は二度とモモの所へ訪れてくることはなかった。

では居酒屋の亭主ニノはどうなったであろうか。灰色の男が床屋のフージー氏の店に姿を現わした日の後、間もない頃、モモはニノを訪ねて行ってみると、夫婦喧嘩の最中であつた。ニノが急に欲を出しはじめ、もうからない常連客を客払いしたというのだ。

「それにさ、毎晩、安い赤ぶどう酒一人一杯じゃあ、何にももうかりやしねえじゃないか。そんなことをしていた日にゃ、俺たちゃこんりんざい成功なんかできねえぞ！」(中略)

「おまえさんのいうその貧乏なおいぼれどものうちにゃね、例えば私の叔父さんのエットーレも居るんだよ。私の身内の人の悪口を言うなんぞ、許さないよ。あの叔父さんはね、金払いのいいお客さんほどお金持ちじゃないけれど、立派で正直な人なんだからね。」

「おまえのエットーレ叔父さんのことを考えたばかりに一生涯小さな居酒屋の亭主で終わる気なんてないぞ。俺だっていっばしの成功をしたいんだ。それが犯罪だとでもいうのか。俺はこのこの店を繁盛させたいんだ。それも俺のためだけではない。おまえや俺たちの子供のためにもそうしたいんだ。」<sup>(36)</sup>

きわめてごもつとも、ご立派に聞こえるけれども、これが正に灰色の男たちの表向きの生活原理＝時間原理なのである。ニノは、成功、繁盛の代償に人情や隣人愛を失おうとしていることを何とも思っていないのである。

それから約1年後、モモがマイスター・ホラの館での1年間の眠りから覚めて再び廢墟に帰ってくる。そこに訪ねて来る者は誰一人いなかった。何日待っても誰も訪ねて来る人はいなかった。モモは淋しさに耐えかねて、自分から昔の友人たちを訪ねて行くことにする。ニノの店へ訪ねて行くと、モモは目を疑つた。そこにはあばら屋同然の昔のニノの店はなく、大きなガラス窓の横長のコンクリートの建物があり《スピード料理店 ニノ》という看板がかかげられていた。店の中に入ると一方の壁ぎわにガラス戸棚が並べてあり、その中にいろいろな料理が並べてある。客はぞろぞろ列をなしてその前を通りながら、食べたい料理を自分の盆の上にのせ、レジへ行くのである。ニノはそのレジに立って、客からお金をもらったり、おつりを渡したりする仕事で忙しく、よそ見をするひまもない。店は大繁盛で客がとだえることはない。モモがレジへ行ってニノに話を聞こうとしても、二、三語話をしただけで後から後から来る客に押し出されてしまう。ほぼ1年ぶりの再会なのに、ニノは忘れかけていたうすぎたない子がまた来たくらいにしか思っていないらしい。結局、話はまた後にし



てくれと言われ、追い払われる。店は大繁盛。ニノはレジでお金のやり取りに余念がない。ニノは事業での出世頭だったのである。ニノは正に、灰色の男たちが言う「人生で一番大切なもの」を手にした男だった。彼には、友情だの、愛だのは、二の次、三の次だったのである。モモから見れば、彼は成功の代償に最も大切な愛を何の良心の呵責もなく失っていたのである。

その次の日、モモは観光案内ジジを訪ねて行った。本稿 122 ページから 123 ページで述べた通り、モモが失踪して程なく、彼は灰色の男たちにあやつられて芸能界で最も有名な大スターにのし上がっていたのである。しかし、有名になればなる程、それに反比例して彼の空想力は枯渇していった。スターの座から降りるのが恐ろしくて、彼は以前に語った話をやきなおしたり、他人のネタを利用したりした。そういう物語は単なる嘘であることは、彼自身が一番よく知っていて、彼は苦しんだ。しかし、新聞には「おどろく程多産」と称賛され続けた。影で灰色の男たちがあやつっていたのである。こうして、彼はうそつきジロラモになりはてたのである。今や彼は、高級住宅地に大邸宅を構え、三人の女秘書、運転手つきの高級車を乗りまわし、分、秒きざみで日程をこなす名人であった。

モモがやっと彼の邸宅を探しあてると、大きな頑丈な門扉は閉ざされていた。門の外で待っていると、いきなり大きな高級車がものすごい勢いで走り出して来た。三人の女秘書を従えて、飛行場へ行くところだった。ジロラモは、モモを自分のとなりの座席に乗せて、積もる話をする。

「たとえ後もどりしたくても、僕はもう後もどりはできないのだ。僕はもうおしまいだ。『ジジはいつまでもジジだ』って僕は言ったよね。しかし、ジジはもうジジではなくなってしまったんだよ。モモ、一つだけ君に言っておくけどね。人生で一番危険なことは、かなえられるはずのない夢がかなえられることなんだよ。僕の場合のようになんかえられてしまった場合は、そうなんだよ。僕にとってはもう夢はない。たとえ君たちのところへ帰って行っても、僕はもう夢見ることにはできないだろう。僕はもう何もかもうんざりしてしまったんだ。今僕が出来る唯一のことは、これから一生の間、あるいは少なくとも僕が忘れ去られ、無名になり、貧乏になるまで、口を閉ざすこと、もう二度と物語を語らないこと、沈黙することだろう。しかし、夢もない貧乏——いやだよ、モモ、それは地獄だよ。だから、むしろ今のままで居たいんだ。これだって地獄だけど、少なくとも居心地はいい。ああ、僕はいったい何を言っているのだろう。」モモはただ彼を見つめてい

るだけでした。彼が病気だということ、死に到る病気にむしばまれているということが、何よりもよくわかりました。<sup>(37)</sup>

そうこう話を聞いているうちに車は飛行場に着き、ジジはカメラマンに囲まれ、女秘書たちに急き立てられて機中に姿を消した。

モモから見ればジジも死に到る病にむしばまれていたのである。死に到る病とは絶望のことである。

では、道路掃除夫ベッポはどうなったのだろうか。これを知るためには、本稿 125 ページから 126 ページに紹介しておいた精神病院の一室でのベッポと灰色の男との鬼気せまる交渉の場にもどらなければならない。ベッポは、モモを灰色の男たちから解放してやりたいばかりに、灰色の男たちの活動についてはこれ以上誰にも何もしゃべらないということと、モモの身代金として 10 万時間節約するという条件をすべて承諾したのであった。

その 2、3 日後、ベッポは本当にその精神病院から退院を許可された。病院から出たベッポは、彼の家にも、廃墟にも帰らなかった。病院から出た足でそのまま街の仕事場へ行き、道路を掃き始めたのである。

でもその掃除のしかたは、もう以前のように、ひと足すすんではひと呼吸、ひと呼吸してはひと掃き、という具合にではなく、せかせかと仕事への愛情などはなく、ひたすら時間をためこむためだけに働いたのです。こんな働きかたをすることによって彼は自分の固い信念を、自分のこれまでの全生涯を否定し、欺いたのだということは、痛い程はっきりとわかっていました。これを思うと自分のやっていることへの嫌悪感から心がいたみました。」<sup>(38)</sup>

こうしてベッポも、仕事に対する固い信念も、じっくり仕事をしながらじっくり考える思慮深さも放棄してしまったのである。ベッポもまた良心の呵責の念から心の病気になってしまっていたのである。

では子供たちはどうなったのであろうか。モモが失踪した後、灰色の男たちの影の画策で、市には《子供の家》が建てられ、街でぶらぶら遊んでいる子供たちは一人残らず強制的にその家へ収容されることになったことは本稿 126 ページから 127 ページで述べた。そのため、いくら待っても廃墟へ遊びに来る子供は、一人も居なかった。街を歩いていても子供たちの姿さえ見ることは出来なくなっていたのである。しかしある日偶然にも、昔、共に「アルゴ船」ごっこをしたりして遊んだ遊び友達パオロ、フランコ、マリアに会うことができたのである。彼らは灰色の制服を着せられ、ほとんど笑い顔を見せなかった。

「で、これからどこへ行くの？」

「遊戯の授業さ、遊び方をならうんだ。」とフランコが答えました。

「それ、何なの？」

「きょうやるのは、パンチ・カードごっこさ。」と、パオロが説明した。

「とってもためになるんだよ。でもものすごく注意力がいるんだよ。」

「で、どうするの？」

「みんなが1枚のパンチ・カードを作るんだ。どのパンチ・カードにも、身長とか、年齢とか、体重とか、その他いろんなことが書き込んである。でも勿論、本当のことは何ひとつ書いてない。そうしないとあまり簡単すぎるから。時には名前のかわりに長ったらしい数字だけのこともある。例えば MUX / 763 / y というぐあいだね。それからそれらのカードをよく混ぜて箱の中に入れる。それから僕たちの誰かが、その中から特定のカードを選び出すのさ。質問をしながら他のカードを取りのけていって、最後にその目的の1枚が残るようにしなければならない。それを一番早くする人が勝ちさ。」

「そんなこと、おもしろいの？」とモモはいぶかしそうにたずねました。

「そんなことはだいじじゃないのよ。」と、マリアが怒って言いました。

「そんなふうに言うことは許されてはいないのよ。」

「ではいったい何がだいじなの。」とモモは知りたがって言いました。

「将来の役に立つってことさ。」と、パオロが答えました。

ここでは遊びでさえも、将来のハイテク時代のためになる遊びに限定され、監督の人から与えられ監視されながら遊ぶのである。ここには、あの「アルゴ船」ごっこで示されたあの天衣無縫の空想力のはばたきも、おじける気配もなく難局に立ち向って行ったあの勇敢さも、雨が降ってきたことに気づかない程の夢中さも、心からの喜びもない。それどころか MUX / 763 / y とは！ これはなんと灰色の男たちの名称と同種の名称ではないか！ 子供たちさえも、正真正銘灰色の男と同種の者たちになり切ってしまったのである。

このように、モモがマイスター・ホラの《どこにもない館》での1年間の眠りから目覚め、円形劇場の廃墟にもどってみると、こちらの世界は完全に灰色の男によって制覇され、人々の生活＝時間は完全に変わってしまったのである。注意すべきことは、この変わり方に中間はないということだ。つまり、モモの生活＝時間の中に灰色の男たちの生活＝時間が入り込んできて、両者が混在しているとか相補的に共生しているとかいうものではないのである。変化

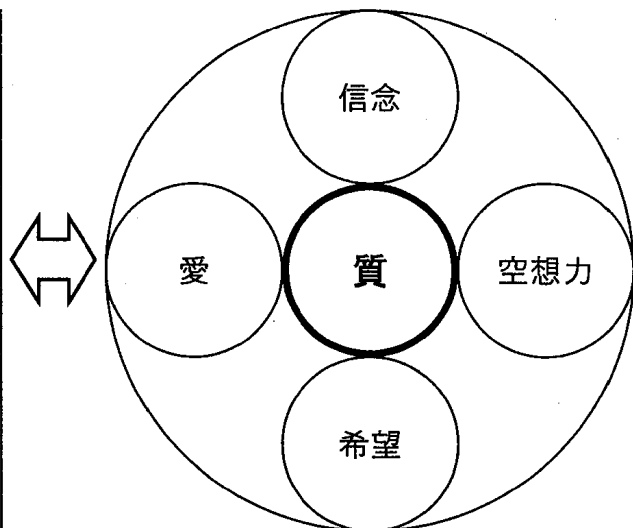
は徹底的なもので、灰色の男たちに制覇された世界での生活＝時間には、モモの時間は完全に圧殺されるのである。灰色の男たちがモモの世界へ侵略してきて、「時間を節約せよ」と言う時、その「時間」はモモの時間を指して言っているのである。

ところで、時間は節約しても節約した当人には残らない。このことが時間が「盗まれる」という意味だった。従って、「モモの時間」を節約すれば、「モモの時間」は節約した当人には残らない。つまり、「モモの時間」は盗まれたのである。「時間は生活である。」これがこの物語のエンデの根本的命題である。従って、「モモの生活」を節約すれば、「モモの生活」は節約した当人には残らない。節約されたその「モモの生活」は、灰色の男たちによって盗まれたからである。つまり、「時間を節約する」＝「時間を盗まれる」、ということは、現実には生活が変化することを意味するのであり、当然のことながら、その生活を規定し成立せしめている内面的なものすべてが変化することを意味するのである。そしてこの物語『モモ』の中では、この変化は極端なものであって、両者が均衡する中間はありえない。従って、灰色の男たちに制覇された世界の時間の本質は純粹に第10図に示されるものであって、第5図に示される価値観と、第10図で示される価値観との共存、ないしは相補的共生はあり得ない。

第10図

	更に速く 更に多く 仕事をする	
更に成功し、 更に多くお金 をもうける	<b>量</b>	将来のため 更に多く 強制的教育 に耐える
	更に多産に 更に有名に 更に裕福に なる	

第5図

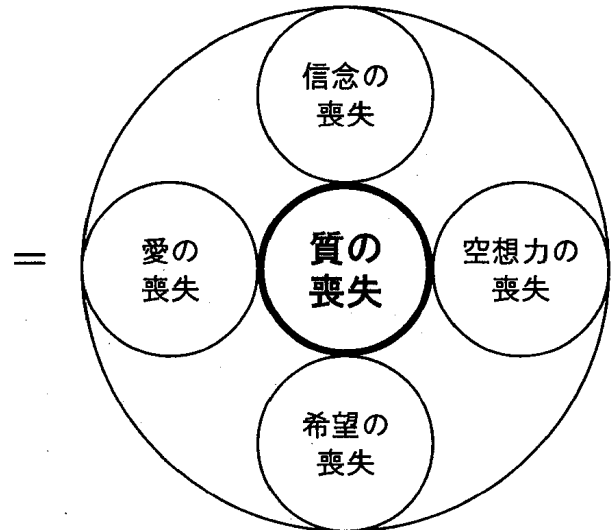


第5図で示されている徳は、モモの世界から灰色の男たちによって盗みとられ、喪失してしまったものということになる。従って、第10図は第11図に等しい。

第10図

	更に速く 更に多く 仕事をする	
更に成功し、 更に多くお金 をもうける	<b>量</b>	将来のため 更に多く 強制的教育 に耐える
	更に多産に 更に有名に 更に裕福に なる	

第11図



結局、灰色の男たちによって時間が盗まれるということの本質的な意味は、灰色の男たちによって人々の心から信念、愛、希望、空想力という超自然的徳が奪い取られるということである。更に根本的に言えば、質を尺度とする価値観が奪い取られる、という意味である。

ところで、この灰色の男たちとは何者であろうか。エンデは、『オリーブの森で語り合う』（丘沢静也訳 岩波書店）の中で、「灰色の紳士たちは、ほかでもない、ものごとをひたすら量としてとらえてしまう思考を代表しているわけだ。すべてのものを計算や計測や計量の対象にしてしまうなら、そうすることによって価値というものゝは棚上げにされ、合計欄にゼロしか残らないことになる。」

(60 ページ) と言っている。また、子安美知子著『エンデと語る』（朝日新聞社）の中では、エンデは「灰色の男たち、つまりテクノロジー」（122 ページ）とも言っている。この両者を考え併せれば、テクノロジーは、ものごとをひたすら量としてとらえる思考を代表している。すべてのものを計量の対象にしてしまふなら、価値というものゝは棚上げにされ、ゼロにしか残らない、ということになる。『モモ』の内容をうらづける言質として見ていいであろう。

量を価値尺度とするテクノロジーの思想によって、質を価値尺度とするモモの思想が「盗まれる」という時、あるいは侵略される（『モモ』の中では、灰色の男たちは「侵略軍」にたとえられている）という時、この価値観の変化は受動的に、非主体的に起きるのであろうか。マイスター・ホラは、モモに次のように語っている。

「ここから、つまりこの《一度もない小路》のこの《どこにもない館》

からすべての人間の時間はやって来るのだよ。」モモは、畏敬の念をこめて彼を見つめた。「ああ、そうするとあなたのご自分で時間をつくっているのですか？」と、彼女は小声でたずねた。

マイスター・ホラはまたにこにこほほえんだ。「いいや、そうじゃないんだよ。私はただの管理人にすぎない。私の義務は、各々の人々にその人に定められている時間を分配してやることだけなのだよ。」「そんなら、あの時間どろぼうたちが人々から時間を盗むことができないように手をうつことだってあなたには簡単にできるでしょう？」

「いいや、それは私にはできない。」と、マイスター・ホラは答えました。

「というのは、人間たちが自分たちの時間をどうするかということは、自分たち自身で決めなければならないのだよ。自分自身の時間を護るのも、自分自身でしなければいけないのだよ。私で出来ることは、人間たちに、時間を分けてやることだけなのだよ。」<sup>(39)</sup>

自分の時間は自分自身で護らなければならないもの。それが「盗まれた」場合には、盗まれた当人が責任を負うべきであって、その責任は誰にも転嫁することのできないものなのである。つまり、自分の主体性の問題なのである。このことは、フージー氏の場合には次のように語られている。

「私たちはあなたの節約の仕ぶりを見まもっています。でもどれだけ多く節約するかは、あなたにまかせます。私たちは決して強制はしません。では、ごきげんよう、フージーさん！」こう言うなり、その外交員はしゃれた彼の灰色の車に乗り込み、走り去って行きました。

フージー氏はそのあとを見送って額をふきました。また少しずつ暖かくなってきましたが、気分が悪く惨めな思いでした。あの外交員が吸っていた短い葉巻きたばこの青い煙がまだ長い間店の中にひどく立ちこめて、なかなか消えませんでした。

ようやく煙が消えた時、フージー氏の気分もよくなりました。煙が消えて行くにつれて、鏡上の数字も消えて行きました。そして、とうとうその鏡上の数字が消えてしまった時、フージー氏の心の中からは、あの灰色の訪問者の記憶も消えてしまったのです。——しかし消えてしまったのはあの訪問者の記憶だけで、決心したことは決して記憶から消えることはありませんでした。今では彼はその決心を自分自身でした決心だと思っているのです。将来いつか別な生活を始めることができるように今から時間を節約しておこうという彼の決心は、さかさどげのついているつり針のよ

うに彼の心の中にささったままぬけることはありませんでした。<sup>(40)</sup>

そうすれば、あの雨の降っていた日、フージー氏の店に訪れてきた灰色の男、すなわち時間貯蓄銀行の外交員 XYQ / 384 / b なるものは、他でもないフージー氏自身の心境の変化だったのだ。この外交員は、フージー氏の新しい価値観を代弁するもう一人のフージー氏だったのである。外交員とフージー氏とのやりとりは、もう一人のフージー氏とフージー氏自身との心の中での自問自答だったのだ。そして時間を節約しようという決心は、純粹に自発的な心境の変化であったにせよ、テクノロジー時代の社会の思想潮流に押し流された心境の変化であるにせよ、彼が意識して選び取った決定だったのだ。このことはジロラモを始め、灰色の男たちによって侵略され制圧された登場人物すべてにあてはまることである。

結局、時間を盗まれるということは、各人自らの責任において質本位の価値観を捨てて、量本位の価値観を取ったということである。そしてその結果、モモ一人を除いて世の人々は全員、死に到る心の病におかされてしまった、ということなのである。言うまでもなく、量本位の価値観は、灰色の男たちに擬人化されている。死に到る心の病におかされたということは、灰色の男たちによって心が侵されたということで、物語は擬人化によって進められているのである。

そうすれば、「盗まれた時間を取り返してくれる」ということの意味は、理論的には単純明快である。すなわち、量本位の価値観を捨てさせて質本位の価値観を取り返してくれるということであり、その結果として、死に到る心の病から癒してくれる、ということである。

この次第も、物語としては量本位の価値観が擬人化されている灰色の男たちと、質本位の価値観が擬人化されているモモとの決戦という形で話は進められている。世界を埋めつくした灰色の男たち対孤立無援の小さい女の子モモとの決戦は、物語『モモ』の中で最も手に汗握るくだりであろう。しかし本稿では、原文引用による実証は断念して、筋の概略を追うにとどめざるをえない。モモ一人を取り残して世界中の人々全員を制圧してしまった灰色の男たちは、遂にマイスター・ホラを支配下におこうと企てる。そのため、灰色の男たちはモモを完全包囲して、マイスター・ホラの館へ行く道を教えるよう脅迫する。モモは拒絶する。しかし、またもやモモを屈服させることに失敗した灰色の男たちは、モモを泳がせておいて、ひそかにモモを見張り、尾行することにする。そこへマイスター・ホラの使者、亀のカシオペイアが現われ、モモはカシオペイアに導かれて、《いちどもない小路》を通りぬけて、再びマイスター・ホラの

《どこにもない館》にたどりつく。モモを尾行していた灰色の男たちは、今回は《いちどもない小路》の進み方はモモを見よう見まねでおぼえて進むことができたので、《どこにもない館》の門扉の前まで押し寄せてきたけれども、彼らが足を踏み入れることができるのはそこまでである。彼らは一錐のすき間もない程押し寄せてきて、マイスター・ホラとモモを包囲する。マイスター・ホラはそれを見て、最後の手をうつ。モモに1時間だけ咲いている1輪の時間の花を与えてから、彼は人間たちに時間を分配してやることを完全に停止し、眠りにつくというのである。そしてモモに次の任務を託す。

時間が停止してしまったことを知れば、——彼らはこのことにきわめて素早く気付くだろう、なぜなら葉巻きの供給が停止するだろうからね——そうすれば彼らはすぐに包囲を解いて、彼らの時間貯蔵庫の方へ駆けつけるだろう。おまえはその後をつけるのだ、モモ。そしておまえがその隠し場所を発見したら、やつらが蓄えておいた時間を取り出せないように邪魔をしなくてはならない。彼らの葉巻きがつきてしまえば、彼らは消滅する。しかし、その後にもまだやらなければならないことが残っている。おそらくこれが一番むずかしい仕事だ。最後の時間泥棒が消滅してしまったら、おまえはその盗まれた時間を解放してやらなければならない。というのは、盗まれた時間が人間たちのところに帰って行ってはじめて、世界は静止状態を終止して、私自身も目覚めることができるのだ。これだけの仕事を全部やるのに、おまえにはたった一時間しか残されていないのだよ。」<sup>(41)</sup>

この戦略はただちに実行に移され、マイスター・ホラはモモに一輪の時間の花を与えて、人間に時間を与えることを停止して、自ら眠りにつく。その瞬間、人間たちは全員そのままの姿勢で動きを停止する。人間に対する時間の供給がと絶えたことに感づいた灰色の男たちは直ちに包囲を解いて、彼らの時間の貯蔵庫のある街はずれの地下の建物へ急ぐ。今度はモモが彼らの後を追う。モモの味方は、亀のカシオペイアだけである。時間貯蔵庫の前に集合した灰色の男たちは、時間の供給の停止がいつまで続くのか予想もつかない事態に直面して、口数を減らして生き残りをはかる。そのため彼らはコインを投げて、裏が出るか表が出るかにより、半数ずつ処刑してゆく。それを繰り返す、ついには6人しか残らない。この6人だけで時間貯蔵庫の前に陣どって、互いにならみ合っている。その時、モモは彼らの時間貯蔵庫の扉を彼女の時間の花によって閉めてしまう。もう彼らには、その時間貯蔵庫の扉を開けることはできない。こうして、彼らの存在を支えている人間から盗みとった時間の花の葉巻の供給は完



全にとざされたのである。そこで彼らは、モモに襲いかかり、彼女から時間の花を奪おうとする。しかし、「他人よりも自分が」という利己主義に徹している彼らは、手の届くところまで追いつめられたモモの目前で互いに相手を後へ引きずり落としあいながらこの最後の2人の灰色の男も自滅する。その時、モモの手の中の時間の花には一片の花びらが残っているだけであった。モモはその一片の花びらで時間貯蔵庫の扉を開けて、盗まれてその中に閉じ込められていた時間の花を解放する。解放された時間の花は、モモを乗せて空に舞い上がり、各々の本来の持ち主の心の中へ帰って行く。こうしてモモは、盗まれた時間を人々に取り返してあげたのである。この瞬間、マイスター・ホラは眠りから覚め、人々は静止状態から解放される。モモは、道路掃除夫ベッポと再会し、抱き合い、肩をたたきあい、喜びの涙にくれる。こうしてこの物語はハッピー・エンドで終わる。

これを本質的に言えば、モモはマイスター・ホラの助言とカシオペアの手助けによって、量本位の価値観を撃破し、質本位の価値観を復権せしめたということである。つまり、量本位の価値観から質本位の価値観への意識変革を実現せしめたということである。このことは、死に到る病に侵され、苦しんでいた人々を治癒せしめ、健康で喜びにあふれる状態に到らしめてやった、ということでもある。灰色の男たちの消滅は、人間にとっては死に到る病からの治癒であった。子安美知子著『エンデと語る』（朝日新聞社）の中で、エンデは次のように語っている。

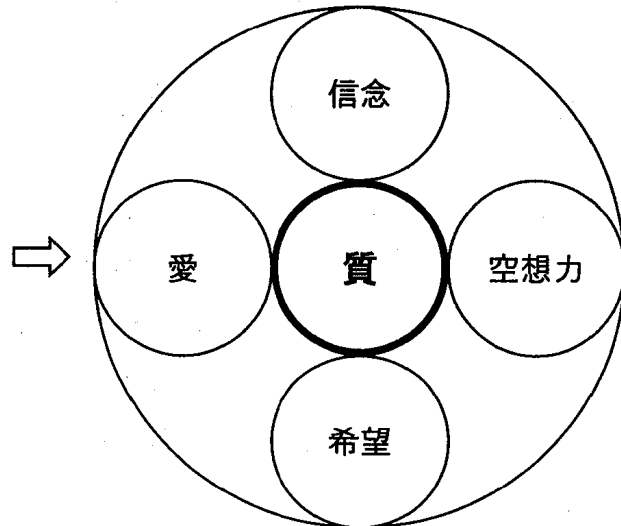
**エンデ** 人間から時間が疎外されていくのは、いのち（生活）が疎外されていくことであり、そうしむけていくおそろしい力が世界にある。しかし一方に、別の力がはたらいており、これが人間に治癒の作用を送ってくる。と、そこまで暗示したつもりです。(127 ページ) (カッコ内本稿の筆者)

この治癒の意識変革を図示すれば、モモによって第10図で示される価値観から、第5図で示される価値観への変革が実現された、ということである。そしてこの変革の実現こそが、「盗まれた時間を人間にとりかえしてくれた」ということの本質的な意味である。そしてこの意識変革は、エンデが『モモ』に託した彼の重要な主張だったのである。このことは、子安著『エンデと語る』の第IV章の章題が「緊急の関心事は、どうやって経済成長の強制から人間を自由にするかです」となっていることから、また、エンデ著、丘沢訳『オリーブの森で語りあう』（岩波書店）の中で、次のように言っていることから裏づけられる。

第10図

	更に速く 更に多く 仕事をする	
更に成功し、 更に多くお金 をもうける	<b>量</b>	将来のため 更に多く 強制的教育 に耐える
	更に多産に 更に有名に 更に裕福に なる	

第5図



エプラー ぼくが評価する文学とは、これまでに確認した「意識の変化」を、前進させ強化するだけじゃなくて、「意識の変化」を明らかにし、「意識の変化」にかたちをあたえもする。そればかりか、この「意識の変化」にまきこまれている人びとに、自分というものを理解させ、そうすることによってその人たちから行動力までもひきだすような文学のことだ。きみの『モモ』とか『はてしない物語』は、疑いもなくそういう文学だった。現代文学のなかには、あからさまに政治的なテーマによりかかった作品もあるけれども、おそらくそういうものよりきみの本のほうが、政治的といえるね。文学は未来を切りひらくこともあるけれども、未来に立ちほだかることもある。

エンデ そう。たしかに、きみのいう通りだ。(220 ページ)

### 結 論

既に本稿第3章で見たように、モモに対する灰色の男たちの勝利はほぼ完全なものであった。モモがマイスター・ホラの《どこにもない館》へ退避してしまったこちら側の世界には、モモの残党は表面的には一人も居なかった。つまり、量本位の価値観が質本位の価値観を完全に駆逐してしまい、この両者の共存はなかった。逆に第4章で見たように、灰色の男たちに対するモモの勝利は、更に完全なものである。灰色の男たちは最後の一人に到るまでモモの目前で消滅してしまったのである。たとえどこへであろうと、落ちのびた灰色の男は一人としていない。つまり、質本位の価値観の復活は完全なもので、そこには量

本位の価値観の残滓さえみじんもない。つまり『モモ』の世界においては、この二つの価値観は完全に二者択一的であって、両者の併存とか、両者の相補的共存は、絶対にあり得ないのである。モモの敗北とモモの勝利、この両者の落差が大きければ大きい程、明暗の対比が鮮明であれば鮮明である程、たしかにストーリーとしてはおもしろくなるであろう。この意味では『モモ』は成功作品であった。しかし、このストーリーでは、価値観の表現としては問題である、といえるであろう。『モモ』の世界は、マンダラの世界とは異質である。質本位の価値観と量本位の価値観、この二者は単純に二者択一で処理されるべきものではないはずである。この観点から見れば、『モモ』は熟しきっていない作品と言えるであろう。この点についてエンデ自身、子安著『エンデと語る』（朝日出版社）の中で次のように語っている。

子安 歩いていくモモは、歩いていくからこそ、時空の外に超え出られる。マイスター・ホラのところに行ける。人間のいのちのみなもとにふれ、その認識をマイスター・ホラと語りあうことができる。それはぜったい電話ですませる話ではない。

エンデ この点が、わが20世紀の文化の決定的問題のひとつなのです。どうにかして外部世界と内部世界を、もういちど相互に浸透しあえるもの、循環可能なものにしていくこと、たがいを鏡として、そこに映しだし、映し返されている姿が見つかるようにならないと、極言すれば、私たちは文化をすっかり失うことになります。なんとしてでも可能性を見つけださなければいけない。それは私たちにとっての急務です。テクノロジーの外界を変えて、人間の内的世界を映し出しうるものにするか、あるいは人間の内的世界を拡大して、テクノロジーを抱えこむこともできるようにするか？ 答えは私にはまだわかりません。ただ、私は、本を書きながらひたすらその試みをしている。とにかく今のままでは、灰色の男たち、つまりテクノロジーは、モモのできることをできないのです。(122 ページ)

最後にもう一点だけ指摘しておかなければならないことがある。話は、灰色の男たちが世界を征服し、量本位の価値観が世界を支配していた時にさかのぼる。フージーもニノもニコラも、ジジもベッポも、子供たちさえも、つまり、世界中の人々全員が灰色の男たちに征服され、死に到る病をわずらっていた。しかしこの中に一人だけ、灰色の男たちに完全には征服されなかった人がいる。それは誰であろうか。モモによってはぐくまれた超自然の徳、すなわち愛、信

念、希望、空想力のうち、たった一つだけ灰色の男たちが盗み取ることができなかつた徳がある。それはどの徳であろうか。それは、道路掃除夫ベッポがモモに対して抱いていた愛である。既に本稿の125ページから126ページで述べた通り、ベッポは、ある日の真夜中、精神病院の一室で彼の枕元に立った灰色の男のつきつけた条件をそのまますべて承諾した。そして、その2、3日後、その精神病院から退院を許された。ベッポは家には帰らず、すぐ仕事を始めたのである。

しかし掃除の仕方はもう以前のようにではなかつた。一歩進んではひと呼吸、そしてひと呼吸してはひと掃き、という具合の掃きかたではなく、せかせかと、仕事への愛などはなく、ただただ時間を蓄えるためだけに働いたのです。こうすることによって、彼の心の奥底からの信念を、これまでの全生涯の生き方全てをも否定し、裏切ることになるのだということは、痛い程はつきりとわかっていました。そして、自分がやっていることへの嫌悪感から、彼は心の病気になるました。

この意味では確かにベッポも灰色の男たちの価値観に屈服させられ、死に到る病を患ってしまっていたのである。しかし、次の事実を見落としてはならない。

もしこれが自分だけのことだったなら、自分自身をうら切るよりは餓死する方を選んだであります。しかしこれはモモのためなのです。モモの身代金を払わなければならないのです。そしてこれが時間を節約するために彼ができる唯一のことだったのです。<sup>(42)</sup>

このように、まるで使い古しのぼろ雑巾のような年老いて見すぼらしい道路掃除のベッポの心の奥深くに、まるで灰の中にとりもり続けていた種火のように、灰色の男たちで埋めつくされた世界の片隅で、うもれて人知れず、モモに対する愛だけは消えることなくとりもり続けていたのである。そして、灰色の男たちの圧倒的な攻撃によってマイスター・ホラの《どこにもない館》に追い込まれたモモを、再びこの世へ呼び戻したのは、モモの友人に対する愛、特にベッポに対する愛と、ベッポのモモに対する愛だった。とすれば、この愛こそは、灰色の男たちを消滅せしめ、世界中の人々を死に到る病から救った本当の主役だったのである。それ故、モモの時間の本質中の本質は「愛」である、と結論することができる。

## 注

- (1) Michael Ende 《MOMO》 1993年 Thienemanns Verlag 57ページ。これと同じ文言は、同書72ページにも繰り返し述べられている。「時間とは生活なのです。そしてこの生活は、心の中に宿っているのです。」これは、この物語のテーマなのである。この二箇所は、この物語のテーマを読者に正確に理解してもらうために、エンデ自ら読者に直接語っているところである。同じ意味のことは、マイスター・ホラの口を通して語られている。

「光を見るためには目、音を聞くためには耳を持っているように、時間を感じるためには人々は心を持っているのだよ。だから心で感じられない時間は、ことごとくなくなってしまうのだよ。それは丁度、めくらの人には虹の色は見えないし、つんぼの人には小鳥のさえずりは聞こえないのと同じなんだ。」(同書159ページ)

また、この物語の大団円で、モモが灰色の男たちの貯蔵庫から盗まれていた時間の花を解放した時、解放された時間の花は空に舞いあがり、そして「本当の居場所に帰ったのです——人間の心の中に。」(同書264ページ)と書いてある。

- (2) 同書8ページ

- (3) ここまで読み進んでくると、モモが住みついたこの廃墟はどこなのかに興味をそそられる。これについてエンデは、子安美知子著『エンデと語る』(朝日新聞社)の中で次のように語っている。

エンデ ええ、『モモ』は、私がむこうで書いた最初の作品です。いってみれば、あれはイタリアという国への私の感謝の捧げものであり、愛の告白であります。私にたくさんのものを贈ってくれたイタリア、そして何よりもローマに対する……。 (10ページ)

なお、イタリアは、

エンデ 1971年に移住しましたから、15年間、暮らしたことになります。(同書9ページ)

という国なのである。なお、エンデがローマの近郊に移住した1971年は、エンデが42歳の時であった。

- (4) 子安氏はこれに引き続いて、エンデとシュタイナーの思想との関連に言及している。それは、その通りであろう。本稿の筆者は、その他に、古代ギリシアの七賢人のひとりであるリンドロスの人クレオプロスの格言とモモとの類似性や、仏教思想とりわけ禅の修業者の基本的な心構えとモモの心との類似性にも強く注意を引かれる。また同じく、仏教の入我我入との類似性にも強く注意を引かれる。

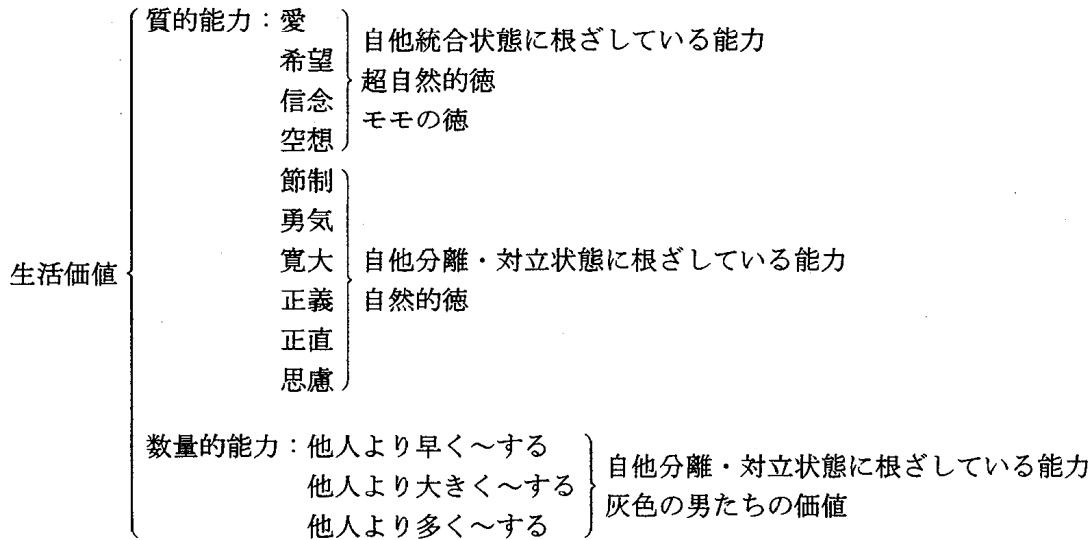
- (5) ここで徳を持ち出したのは、いささか唐突ではあるが、『モモ』の時間の本質を考える場合、生活の場での価値を念頭におくことがどうしても必要だからである。

それ故ここで、徳についての基本的な考え方を略説して、明確にしておくことにしよう。モモの本質である超自然的徳については、本稿の本文を参照してもらうこととするが、超自然的徳というのは要するに、現実(自然)が如何なるものであれ、それには依存せず「我、愛する」、「我、希望する」、「我、信ずる」、「我、空想する」質的・非量的能力である。この超自然的徳は、生得的徳と称することも出来よう。

それに対して、自然的徳というものがあって、これは伝統的に、節制、勇気、寛大、正義、正直、思慮等の能力が与えられている。こういう能力は、後天的能力、後天的徳と称することができる。というのは、人間は誕生して以後、自分と親、自分と他人、自分と社会、あるいは自分と環境という具合に、他者の存在認識を形成しながら成長して行く。生まれながらの自我を中心核にして、あたかも樹木が年輪を形成して成長して行くように、その外側に他者意識を形成しながら大人になって行く。この自他分離過程の中で、自分と他者との快適な関係、ないしは好ましい関係を形成する能力をも身につけて行く。こういう能力を、伝統的に、自然的徳と称してきたのである。つまり、自然的徳というのは、自他分離の認識に立ち、「他者・自然がかくかく、しかじかである故に、」それに対して「我、節制する」、等々の能力なのである。こういう能力も、これを伝統的には徳と称し

ているが、質的・非量的能力と見なされ、量的な概念では握えられてはいないのである。この自然的徳は、超自然的徳とは成立根拠は異なっているけれども、両者とも質的な能力であるが故に、相補的に共存できるもの、否、むしろ共存すべきものと考えられてきたのである。

しかし、灰色の男たちの拠って立つ「他者よりもより早く、より多く～する」能力は、自然的徳と同様に自他分離関係において成立している能力ではあるが、自然的徳や超自然的徳とは異なって、数量を本質とする能力なのである。例えば、「他人より1万円より多く儲ける」能力は、1万円という数量を本質とする能力であって、質的な能力ではない。では、この量的な能力と上記の質的な能力（徳）とは共存可能なのか、共存不可能なのか、エンデは『モモ』で、この点を問題としているのである。



- (6) Michael Ende 《MOMO》 1993年 Thienemanns Verlag 94ページ
- (7) 同書 15～16ページ
- (8) 同書 20～21ページ
- (9) 同書 23～24ページ
- (10) 同書 24～34ページ
- (11) 同書 43ページ
- (12) 同書 44ページ
- (13) 同書 49～54ページ
- (14) 同書 40ページ
- (15) 同書 35～36ページ
- (16) 同書 36ページ
- (17) 同書 41ページ
- (18) 同書 79～80ページ
- (19) 同書 58ページ
- (20) 同書 15～16ページ
- (21) この時間貯蓄銀行の外交員(灰色の男)ナンバー XYO / 384 / b とフージー氏とのやりとりは同書 59～68ページ参照。
- (22) 同書 81～82ページ
- (23) 同書 152～153ページ
- (24) 同書 94～97ページ
- (25) 同書 117～118ページ
- (26) 同書 159ページ

- (27) 同書 174 ~ 176 ページ
- (28) 同書 179 ~ 180 ページ
- (29) 同書 181 ~ 182 ページ
- (30) 同書 185 ~ 186 ページ
- (31) 同書 94 ページ
- (32) 同書 96 ~ 97 ページ
- (33) 同書 67 ページ
- (34) 同書 80 ページ
- (35) 同書 82 ページ
- (36) 同書 84 ページ
- (37) 同書 207 ~ 208 ページ
- (38) 同書 183 ページ
- (39) 同書 159 ページ
- (40) 同書 68 ページ
- (41) 同書 244 ページ
- (42) 同書 183 ページ